J.S. バッハ『マタイ受難曲』，ユダのアリア (Nr. 42) における「神の優しい眼差し」

——ユダ像理解のひとつの試論——

三浦　望

J. S. Bach, *Matthäus-Passion*: Mercifulness of Divine Outlook in the Aria of Judas (Nr. 42) —— An Essay on Bach's Interpretation of Judas Iscariot——

One of the most famous pieces of passion music, J. S. Bach's *Matthäus-Passion*, has an intriguing aria, called the Aria of Judas (Nr. 42). While the minor scale is the basic key for the whole opus, this aria has a strangely vivacious major key, which somehow makes listeners wonder "why" this scale for the aria of Judas—after he has hanged himself and committed suicide. As a matter of fact, this aria has aroused a lot of discussions and problems concerning its interpretation ; there were those cases that this aria was omitted because of its "*out-of-place-ness*." Tadashi Isoyama, a Japanese musicologist and scholar of J. S. Bach, postulates that this aria is a counterpart of the aria of Peter (Nr. 38), and that both express Bach's understanding of sinful human nature and the overwhelming divine grace upon this human nature. The present writer basically agrees with his position, and thus in this essay tries to elucidate how this interpretation of Judas was "progressive" and "modern" according to the opinions of Bach's contemporaries. An examination of the texts on the passion narratives in the Synoptic Gospels figures out how negatively the imagery of Judas Iscariot was formulated from the beginning of the early Christian community, while the recognition of Judas as the alter ego of sinful humanity surely took root among popular devotion. The Aria of Judas voices—in a quite subtle way— the "restoration of Judas Iscariot," through which Bach underscores the unconditional mercifulness of divine love for humanity.

Ⅰ．　序
Ⅱ．　マタイ受難曲のアリア Nr. 42「わたしのイエスを返してくれ！」
　1. バッハ『マタイ受難曲』の構成とその中でのアリア Nr. 42 の位置
　2. 『マタイ受難曲』におけるユダ理解の神学的背景
　3. アリア Nr. 42 における聖書のモティーフ
Ⅲ．　福音書におけるユダ像
　1. 共観福音書におけるユダの位置づけ
　2. マタイ福音書におけるユダ像
　3. ルカ福音書におけるユダ像
　4. ルカ福音書の特殊記事―神の憐れみの譬え話《放蕩息子の帰還》
Ⅳ．　バッハの「ユダ像」解釈の可能性
　1. バッハの受難におけるユダ像
　　a)．アリア Nr. 39
　　b)．アリア Nr. 42
Ⅴ．　結び

補遺：【図像の中のユダとペトロの対比】

Ⅰ．序

ヨーハン・セバスティアン・バッハ（Johann Sebastian Bach, 1685-1750）『マタイ受難曲』（*Matthäus-Passion*, BWV244）の中にひとつの謎に満ちたアリアがある．それは，イエスの十二人の弟子のひとりで，イエスをユダヤ教の当局側（大祭司とその手下たち）に引き渡したイスカリオテのユダが，イエスの逮捕後に自分のしたことを後悔し，報酬金として受け取った銀貨三十枚を神殿に投げ込んで首吊り自殺した後に歌われるもので，その歌詞は下記の通りである[1]．

私のイエスを返してくれ！	Gebt mir meinen Jesum wieder!
見るがいい，殺しの報酬である金を，	Seht, das Geld, den Mörderlorn,
戻ってきた放蕩息子はお前らの	Wirft euch der verlorne Sohn
足もとに投げ出した．	Zu den Füßen nieder!
私のイエスを返してくれ！	Gebt mir meinen Jesum wieder!

まず，上記五行のうち，一行目と五行目の「私のイエスを…」が枠組みを構成しており，明らかに一／五行目の発言と，二〜四行目の語りの主体が異なることは理解できよう．ここでのイエスの返還要求を歌っている主体は一体誰かという問題が，常にこのアリアの解釈に伴ってきた．ユダ自身は，その直前の Nr. 41（第41曲）においてレチタティーヴォ（福音書記者）が，「そこでユダは銀貨を神殿に投げ込み，身を起こして去ると，首を吊った」(Und er warf die Siberlinge in den Tempel, hub sich davon, ging hin und erhähgete sich selbst) とユダの自殺を告げているのであるから，Nr. 42 のアリアを死んだユダが歌うという，極めて奇妙なことになってしまうわけである．しかしながら，筆者は少なくとも一（五）行目でイエスの返還を求める主体はユダ自身に他ならないという解釈に同意したい．この点については，磯山雅が下記の通り見事に解明してくれているので，これをここでの前提事項としたい．

このアリアを歌う主体は誰であるかという問題に関しては様々な解釈があった．ユダではないとする解釈が比較的多いが，その場合，第41曲までのレチタティーヴォの主役であるユダから，突然——むしろ，不自然に，しかも祭司たちの二重唱を経た後で——視点の変更が強いられることになる．フィーリプ・シュピッタ (Philipp Spitta, 1841–1894)[2] は，ここでの主体を「出来事を間近で見た人，すなわち弟子か，イエスに従っていた他の者」[3] としつつ，この視点の変更に不満を表明している．後述するように，バッハの受難曲のアリアでは，より抽象化された人間存在そのものの在り方やその反省としての感情表現が歌われることが多いのであるが，それと同じ流れとしてここでの Nr. 42 のアリアを考えると，シュピッタの指摘通り，「個別的なケースに関わる，限定的で他人事のような感情を見出す」結果になってしまうというのも理解できない話ではない．マタイ受難曲の初版において，第二部冒頭のアリア (Nr. 30) が Nr. 42 と同様にバスの独唱であったことを併せて考慮するならば[4]，最終版で Nr. 42 がユニークなバスの独唱アリアとして残った意味も含めて，このアリアは単なる抽象

化の歌ではない—つまり，イエスの返還要求を求める主体はやはりユダ自身である—という説明がより説得力を持つと思われる．

磯山は，バッハが依拠したハインリッヒ・ミュラー（Heinrich Müller, 1631-1675）[5] の受難説教をもってさらにこれを裏付ける．ミュラーの説教には次のように書かれているのである．「彼（ユダ）は，銀貨三十枚を提供し，それを祭司長たちの足元に投げ出して，こう言おうとする．『さあ，あなたがたの金だ．私の主を私に返してくれ．』しかし，遅すぎた．」明らかに，ユダが「わたしのイエス meinen Jesum」の返却を要求しているのである[6]．

また，ここで歌われている歌詞の内容もさることながら，このト長調のアリアがそれまでの受難曲の流れの中で際立って「明るく」・「テンポがよい」ことは，誰の耳にも明らかであろう．ホ短調という，どうあっても哀愁に満ちた雰囲気を醸し出す合唱やコラールで始まる受難曲において，このト長調の「明るいアリア」が極めて不可思議な音色を提示していることは否めない．実際，このアリアの真価はなかなか理解されず，シュピッタは，「全アリアの中の唯一の批判すべき楽曲」と見做していた．以来，このアリアを巡る評価は様々で，時には割愛されて演奏されることもあったという[7]．やはり，誰が聴いてもこのアリアは，イエスを引き渡し，最後には首を吊って自殺するイスカリオテのユダに関するものとしては，何か奇妙に理解し難い音色なのである．

II．マタイ受難曲のアリア Nr. 42「わたしのイエスを返してくれ！」

1. バッハ『マタイ受難曲』の構成とその中でのアリア Nr. 42 の位置

バッハのマタイ受難曲全体の音楽的構成について説明することは，筆者には度量外のことであるが，マタイ受難曲の構成におけるユダのアリアの位置づけを，ある程度確認しておきたい．

『マタイ受難曲』の成立史については，幾つかの謎があるのだが，それ

についてここで深入りする必要はないと思われる．ただ，われわれが現在譜で聴き親しんでいる『マタイ受難曲』は，1736年の「改訂版」(＝最終稿）であり，作品の初版や原型ではないということは確認しておくべきであろう[8]．

磯山は，マタイ受難曲の「三重構造」という表現を用い，「聖句」・「マドリガル的自由宗教詞」・「コラール」の3つから構成されているとする[9]．言うまでもなく，『マタイ受難曲』の筋立て的な枠組みを構成しているのは，マタイ福音書の受難物語（第26-27章）である．バッハがルター訳のドイツ語聖書の受難記事を極めて重視し，受難の出来事を語るレチタティーヴォ歌詞を勝手に作詞する当時流行の「受難文芸もの」には決して手を出しておらず，むしろ，1736年の自筆総譜では，福音書記者とイエスのレチタティーヴォだけが特別に赤インクで記されている事実からも，そのルター訳ドイツ語聖書に忠実であろうとするバッハの姿勢が読み取れる[10]．

全体は，第一部（Erster Teil）と第二部（Zweiter Teil）から構成され，全部で全68曲（BWVでは78曲である），24の場面に区分される[11]．アルフレード・ホイス（Alfred Heuß, 1877-1934）は，マタイ受難曲を「聴者の想像力という生きたスクリーン上に生起するドラマ」として提示しているが，聖書の受難記事の間に挿入される挿入楽曲が，受難記事全体の筋の運びと密接に関連づけられ，ある意味でドラマの進行を遮る「考察」(meditatio/comtemplatio）であると同時に，聖書記事の展開するドラマを新たな応答や敷衍を持って拡張しつつ，ドラマの筋の中に収斂するように構成されているという[12]．物語の進行や発展を迎えるごとに挿入される曲の歌詞には二つの出典がある．ひとつは，ドイツ・プロテスタント教会の賛美歌コラールであり，もうひとつはその時代のマドリガル的自由宗教詞である．三宅幸夫は次のように説明する．「前者のコラールを受難を各場面に対するプロテスタント教徒全体の普遍的かつ伝統的な反応とすれば，後者の宗教詩は，個人的活直截的な反応と性格づけられよう．バッハはこの歌

詞の性格の相違を，前者には簡素な四声体の音楽，後者には表出力に満ちた自由な音楽を配すことによって強調している．これは，また過去と現在，普遍と個別といった対概念を作曲のスタイルで描き分けたと言い換えることもできるだろう．」[13]

まず自由詩については，ピカンダー（Picander「カササギ男」）というペンネームで知られるクリスチャン・フリードリヒ・ヘンリーツィ（Christian Friedrich Henrici, 1700–1764）[14] の作詞であることが，バッハ自身の自筆総譜への総評のタイトルページに記されている[15]．ピカンダーは，1724/25年から30年代にかけて，バッハの良き協働者としてカンタータやオラトリオの台本を書いた人物であるが，誰もが異口同音に認めるように，特出した才能に恵まれた第一級の詩人というよりは，むしろ世俗的な題材を大衆好みの流行詩風に仕上げるパロディの達人であったと言える．バッハ自身は，年下で協働しやすいピカンダーのパロディ手腕を重用し，この受難曲にも彼作曲の『マタイ受難曲』歌詞を採用しているのである[16]．

そのピカンダーの作曲歌詞で特徴的なのは，要所要所で登場する「シオンの娘たち」（Tochter Zion）と「信ずる者たち」（die Gläubigen）の対話交流的なドラマトゥルギーであろう．これは，1711年のバルトルト・ハインリッヒ・ブロッケス（Barthold Heinrich Brockes, 1680–1747）の受難劇台本に由来するが，ピカンダーはさらに「シオンの娘たち」と「信ずる者たち」の直接対話や対峙を取り入れ，これを言わば受難劇のライトモティーフとして据えたのである[17]．また，その多くが導入のレチタティーヴォを伴うアリアは，説教を挟んで，説教前（第一部）に七曲，説教後（第二部）に十曲配置されているが（本文末尾の「『マタイ受難曲』におけるピカンダー／バッハのアリアの配置と構成」参照），この「シオンの娘たち」と「信ずる者たち」の対話は，明らかに両方に三曲ずつあり（Nr. 1, 20, 27//Nr. 30, 60, 67）各部の最初と最後の枠組みを形成しているだけでなく，その二つの焦点（Nr. 20 ゲッセマネの園におけるテノールのアリア //Nr. 60 ゴルゴダに

おけるアルトのアリア）が全曲の中のハイライトを形成している[18].

さらに，この「シオンの娘たち」と「信ずる者たち」の対話的な性格はマタイ受難曲理解の鍵でもあり，実は，ここから対話・対比の発想を得たバッハはマタイ受難曲を，複合唱，複合奏の手法で作成しており，杉山の説明によると，「合唱はもちろんのこと，オーケストラも通奏低音にいたるまできちんと二群に分け，さらに福音史家とイエスを除くソロ歌手たちも，それぞれ固有の群に配置するという，徹底した二群構成を貫いたのである」[19]．これが意味するところは，ユダのアリアを考える上では決して小さなことではない．ユダのアリア（Nr. 42）は，第二群[20]（のバス）によって担当されているが，これは先のペトロの悔悛のアリア（Nr. 39）の第一群（のアルト）によって担当されるものと明確に対応・対比されている．バッハはこの二つのアリアを一対のものとして想定し，同じように，バイオリン独奏[21]，低声部の独唱など，意識的に対比させているのである．前述したアルフレード・ホイスの場面分けによると，第13場面（「ペトロの否みとその顚末」第38～40曲）と第14場面（「ユダの裏切りの顚末」第41～42曲）がシンメトリーな対照として描かれているのである[22]．

自由詩をバックボーンとして考え，その構成を「シオンの娘たち」と「信ずる者たち」の対話的ドラマトゥルギーを軸にして追ってみると，マタイ受難曲の構成が比較的容易に提示される．しかしながら，この構成は実際の演奏では非常に分かりにくくなっている．バッハが聖句を非常に熱心に作曲し，また前述のように頻繁に挿入されるコラールにより，全体構造が極めて多焦点・多層的で複眼的な厚みのある構造になっているからである．このような多重構造の中では，自由詩の部分だけが特に際立っては聴こえることもない．

さて，コラールについてであるが，マタイ受難曲には，十五――厳密には十三――曲のコラール（賛美歌）が配置されている[23]．ルター派の礼拝で歌われ，人々が幼い頃から慣れ親しんだものであるコラールは，受難曲の中に有機的に位置づけられ，受難の道行にしっかりと埋め込まれている．

また，コラールこそ，バッハと当時の聴者との「もっとも大切な接点」であり，バッハの独創的な受難曲の中で，聴衆が歌い慣れたコラールをもって共に礼拝に介在する機会でもあった[24]．また，挿入されるコラールには，先行する聖書の場面をバッハ自身がどのように理解・解釈して考察しているかを示すもので，ドラマの進行に「間・隙間」を作りつつ，バッハ独自の創意工夫が表明される箇所でもある．特に，第1曲で使用されるコラール「おお神の子羊，罪なくして…」(O Lamm Gottes, unschuldig...)[25]は，自筆総譜の中でバッハは赤インクでしるしているが，通常赤インクでしるされるのは聖句箇所であるので，このコラールが特別に聖句に匹敵する重要性を帯びていることを端的に示している．ここに典型的に現われているように，コラールはより高い次元からの受難・十字架の出来事の解釈を示す役割を担い，反省的な視点が物語の進行を一歩深めるように工夫されている．受難曲中に使用されるコラールは9種類で，そのうち4曲が宗教改革初期のルター時代に遡るものであり，残りの5曲は17世紀前半から半ばにかけてのものである[26]．また，宗教改革期に遡るコラールは，第一部に集中しており，Nr. 1, 25, 29, 32である．第一部は，冒頭と掉尾にそれぞれコラールが置かれ[27]，第一部を囲む形でしっかりとした枠組みを形成している．また，5回にわたって登場するパウル・ゲールハルト(Paul Gerhardt, 1607–1676) の有名な「受難節コラール」は，マタイ受難曲のシンボル的な存在でもあり，筆者などは四旬節になると教会の典礼で歌われるこの曲を思い起こすのであるが，第一部と第二部の楔的な役割を果たし，全体に統一感を与えている．

2.『マタイ受難曲』におけるユダ理解の神学的背景

ここで，マタイ受難曲におけるバッハのユダ理解について，その神学的背景を探ってみたい．近年，グノーシス文書のひとつである『ユダの福音書』が修復・翻訳されたためか，イスカリオテのユダに関する関心が高まり，関連著作が増えたように思われる[28]．イエス自身に選出された十二

人の弟子の一人でありながら，最終的にユダヤ教当局側に自分の師を引き渡した人物についての考察は，イエスとユダという師弟関係においても，また神の救済計画の中に一人の人間の自由意志による決断と実行が悲劇的なかたちで組み込まれているというジレンマにおいても，人々の想像力をかき立ててきた．原始キリスト教団が，このユダに関する伝承を福音書の中に採用して「裏切り者」としてのユダ像を提示し，新約聖書外典や初期教父たちの文書には「悪魔の手先」・「救いから外れた人間」として否定的・影的なユダ像が描かれてきたのも事実である[29]．グノーシス文書であるとは言え，ユダが神によるイエスの贖罪という救済計画の中で積極的にその一端を担う役割を与えられていたとする『ユダの福音書』の内容は，ユダの復権という意味においても確かに興味深いものがある．

今，「ユダの復権」という言葉を使用したが，福音書や初期教父たちが描く悪魔的な「裏切り者の弟子」ユダ像に対して，師を引き渡したユダの意図やユダ自身の救いについてより中立的もしくは擁護的な再解釈を行ってきた人々も少なくはなかった．19世紀以降，いわゆる聖書学がひとつのアカデミックな学問分野として確立した後では，ユダの復権・擁護についての再解釈は枚挙に暇がないほどであるが[30]，中世からルネサンス期までの間を通じてのユダ解釈がどのようであったかは，資料的にも僅少で調査も困難であるという事実がある．しかし，ウィリアム・クラッセンの提示する資料によれば，中世以降，ユダについての理解は，かなり多様性に富んでいたことが窺える[31]．同時にまた，ユダへの憎悪は，中世以降，さらにこのユダと同一視されたユダヤ人へ憎悪・偏見と結びつき，イエスを死に至らしめたユダヤ人一般への敵対は，キリスト受難劇において顕著に表現された例も多々あることが荒井によって指摘されている[32]．ただし，こうした一般大衆が抱くユダに対する敵意や憎悪とは別に，イエスの死を人間そのものの罪の結果として理解する見方も人々の中で定着していたことは，下記のような，宗教改革期のドイツ民衆の間で歌われていた詩歌の二つの例からも窺えよう[33]．

ああ，それはわれわれが犯した罪であり，ゆゆしい破戒だった．
神の真の御子キリストを十字架に釘打ちしたことだ．
このことで，哀れなユダをひどくののしるのはやめよう．
ユダヤ人の仲間を責めるのはよそう．罰せられるべきはわれわれなのだから．

ああ，われら憐れな人間よ，何をしたのか．
われらの主，イエス・キリストを，何度も裏切った．
われらは地獄で大いなる責め苦に遭わなければならなかった．
もし主が助け手と仲保者であろうとされなかったなら．

これらの詩歌に表現された「われわれの罪」という考察は，マタイ受難曲の罪（人）理解とほぼ同じラインを示していると言えるのではないか．(Cf. 第29曲「おお人よ，お前の大きな罪を嘆くがよい」)[34]．ここでは特定の人物ではなく，イエスの死が人々の罪に帰せられている[35]．また，カトリック，プロテスタントを問わずキリスト教教義においては，これが正統な罪理解であって，新約聖書文書の誤った解釈・曲解により，ユダとユダヤ人を同一視し，イエスの死がユダヤ人一般に帰せられるようなものこそが正統信仰から逸脱した歪曲理解であったことは言うまでもない．

おお人よ，お前の大きな罪を嘆くがよい．	O Mensch, bewein dein Sünde groß,
それゆえにキリストは父のふところを出て，	Darum Christus seins Vaters Schoß
地上へと下ったのだ．…	Äußert und kam auf Erden; ...
私たちの罪の，重い荷を背負われた．	Trüg unser Sünden schwere Bürd,
丈高い十字架につけられて．	Wohl an dem Kreuze lange.

(Nr.29)

さて，バッハの時代，このユダの神学的理解についてどのような可能性が存在していたかを考察する必要があるが，磯山は，バッハの神学に関する蔵書研究から，彼に神学的理解に影響を与えた可能性のある二人の学者—ヨーハン・ヤーコプ・ランバッハ（Johann Jacob Rambach, 1693-1735)

とハインリヒ・ミュラー―を挙げている．特にミュラーに関しては，バッハ神学蔵書にもミュラーの受難説教集[36]が含まれており，ピカンダーがその歌詞の中で使用しているイメージがこのミュラーの受難説教集から採用されていることをある程度証明している[37]．

ピカンダー／バッハによるアリア「私のイエスを返してくれ」のテクストが，この歌詞の主体の問題を含めて，ミュラーのユダ解釈に拠っていることは，既に冒頭で述べた．しかし，興味深いことに，ミュラーのユダ解釈はむしろ，最終的にユダを断罪する方向に傾いている．エルケ・アックスマッハーによると，「ユダの死因が首吊りというより，悪魔の『首ひねり』（悪魔が彼を空中にもちあげ，地上に落とした）ではなかったかと述べ，さらに，ユダの懺悔にはあらゆる点で欠陥があったこと，彼の信仰は結局のところ福音的ではなく律法的で，それゆえに彼は，キリスト・イエスのすべての恵みから外されたことを指摘する．ここには，ユダを復権させる意図は見当たらない．」[38]

ここで注目されるのがランバッハのユダ解釈である．磯山自身も認めているように，バッハ神学蔵書にランバッハの受難論（『キリストの受難全体に関する考察』〔1730〕）が含まれているかどうかは必ずしも断定できないし，この著作の出版年代がマタイ受難曲よりも後であるのは事実である[39]．しかしながら，敬虔主義でありバッハと同世代の神学者であったランバッハは，ハレ大学の神学教授であり，ハレでは日曜説教も担当していた．バッハがハレの聖母教会と関係があったという事実からは，二人の実際的な関連性を示唆する可能性もある．少なくとも，バッハの生きたその時代の中にユダ解釈に関して，同じような理解や解釈があった事例としては意味があると思われる．そのランバッハは，ユダの悔悛が誠実なものであったが，その中には信仰の欠如と誤りが含まれていたために，自殺という堕落の道を選択することになった（この後半は伝統的なユダ理解である）という[40]．しかし何よりも特筆すべきは，「われわれ自身がいつでもユダになりうる」と説き，ユダの裏切りは罪人であるわれわれ自身の問題であると

提示している点であろう．このようなユダ理解が既にバッハの生活範囲の中にあったということは，下記でバッハ自身のユダ理解とそのモティーフを解釈する上で重要なことと思われる．

3. アリア Nr. 42 における聖書のモティーフ

アリア Nr. 42 で使用されている聖書のモティーフは，マタイ福音書の受難物語に出てくるユダ像はもちろんのこと，それ以外にも，ルカ福音書からの「放蕩息子の帰還」（ルカ 15: 11-32）も含まれている．このように一つの福音書記事の別の福音書記事を混合する（conflate）手法は，バッハに限らず，ルター派の聖書釈義では珍しいことではなかった．実際，ドイツではいわゆる「通作（through-composed）受難劇」が伝統的に発達し，福音書の聖書テクストをそのまま多声化する受難曲が見られたが[41]，イタリアとは異なるドイツ受難曲のひとつの特徴は，四つの福音書の記述を交合してひとつのストーリーとして仕上げる「調和福音書」（summa passionis「調和受難物語」）である[42]．これは磯山によれば「福音書の受難記事が互いに補い合い，それによってひとつの真理を指し示すという，『福音書の調和 Evangelienharmonie』の考えを前提としている」[43]．ルター自身，四福音書の総合版を作成したいという願望を持ち，その友人であるヨーハン・ブーゲンバーゲン（Johann Burgenhagen, 1485-1558）が作成した『四人の福音書記者による，われら主イエス・キリストの受難と復活の物語（*Historia des Leidens und der Auferstehung unsers Herrn Jesu Christi aus den vier Evangelisten*）』（1526）を，ルターは 1528-1540 年にかけて受難と復活の説教テクストとして使用していた[44]．この影響は大きく，ルター派地域ではブーゲンハーゲンの「調和福音書」に基づく受難曲が多数作曲されたという．バッハの福音書記事の混合の背景には，このようなルター派の伝統があることを念頭に置いておきたい．また，バッハの『ヨハネ受難曲』においても，元来ヨハネ福音書にはないマタイ福音書からの聖書記事（ペトロの号泣シーンとイエスの死後の天変地異のシーン）が第一稿には挿入

されていた[45]．従って，バッハがマタイ福音書の受難記事に沿って作曲する場合にも，他福音書の出来事解釈の視点が常に介在していたと想定することができる．

ここで，上記のアリア Nr. 42 で使用されている聖書のモティーフと福音書のユダ像をまとめておきたい．ルター訳ドイツ語聖書こそ，バッハがマタイ受難曲を作曲するにあたっての最も重要な源泉であり，そこからインスピレーションを受けたのだと前提すれば，福音書に描かれるユダ像の把握は意味がないとは言えない．また，福音書記者がその福音書の中で描くユダ像の考察を通して，福音書におけるユダ像とバッハの『マタイ受難曲』におけるユダ像の相違点も浮き彫りにされよう．

Ⅲ．福音書におけるユダ像

1. 共観福音書におけるユダの位置づけ

最も古い福音書と言われる「マルコ福音書（マルコによる福音書）」が著されたのは定説では紀元後 70 年頃であるが[46]，この福音書の中で，イエスの十二人の弟子のひとりである「イスカリオテのユダ」が，自らの師であるイエスを祭司長たちに（マコ 14：10）引き渡し（*παραδίδοναι*），逮捕の手引きをした者として描かれている（マコ 14：43–46）．福音書の成立より先に著されたパウロの書簡の中には，パウロ自身が原始キリスト教団の「伝承」として受継いだ言い回しの中に「十二人に現れた」復活のイエスに関する伝承もあり，イエスの弟子の一人が裏切り者であったという伝承をパウロは知らなかったらしい（Ⅰコリ 15：5）[47]．いずれにしても，福音書という文学形式で表現されたイエスの物語においては，その弟子の一人がイエスを引き渡す役割を果たしているのである．

弟子の一人が師を裏切るというドラマティックな設定が福音書記者の創作であるかどうかについては議論があるが，ここではそれには深入りせずに，イエスが自ら十二人の弟子を選抜したが，こともあろうに，そのうち

の一人がイエスの逮捕の手引きをし，ユダヤ教当局側に引き渡すことになってしまったという悲劇的な史実とその伝承を，福音書記者は詩篇や預言書[48]を手持ちの伝承に編み込みながら，苦労して説明・解釈しようとしているのだと理解することに留めたい[49]．いずれにしても，福音書の物語の中で，イスカリオテのユダはイエス逮捕において重要な役割を果たすことになる．事実，「十二人」の弟子のリストにおいても，彼の名は一番最後に置かれ，ある意味で特別に重要な役割を果たす弟子として記憶されているわけである．

マルコ福音書は，その福音書という文学形式と共に，その後に著された諸福音書のイスカリオテのユダというイエスの一人の弟子像の原型となる．ユダに関して共通するプロットとして，〔1〕．イエスの十二人の弟子のリスト（マコ 3: 16-19; マタ 10: 2-4; ルカ 6: 14-16; ヨハ 6: 71）[50]，〔2〕．権威側へのユダの内通（マコ 14: 10-11; マタ 26: 21-25; ルカ 22: 3-6），〔3〕．最後の晩餐におけるイエスの裏切り予告（マコ 14: 18-21; マタ 26: 14-16; ルカ 22: 14-23; ヨハ 13: 21-30），〔4〕．逮捕の場面でのユダの手引き（マコ 14: 43-46; マタ 26: 47-50; ルカ 22: 47-48; ヨハ 18: 1-6）がある．マルコ福音書をもとに書かれているマタイ福音書とルカ福音書[51]には，これらに加えてさらにユダの後日談（マタ 27: 3-10; 使 1: 15-20）が挿入されている．これらのユダに関する場面を比較すると，各福音書において，ユダ像についての伝承の変化・発展が浮き彫りにされる．イエスの逮捕後にユダを自殺する弟子として描くのは，他でもないマタイ福音書である．

従って以下では，マタイ福音書におけるユダ像の特徴を明確にするために，二つの共観福音書——すなわち，マタイ福音書とルカ福音書——におけるユダ像を考察してみたい．

2. マタイ福音書におけるユダ像

定説では，マタイ福音書は紀元後 80 年代に著され，二資料説[52]に従えば，Q 資料とマルコ福音書を基に独自の特殊資料をも加えて，新たな福音

書として形作られたものである[53]．物語のプロットは基本的にマルコ福音書のそれに従っているが，かなりのレベルでの教養を有するユダヤ人キリスト者であるこの福音書記者は，その独自の神学的解釈によって，様式美的に完成度の高い福音書を創作した．ヘブライ語（旧約）預言書を多様に引用し，イエスは律法（トーラー）の完成者として提示されている．特に，受難物語については，旧約的なミドラッシュであると言われ，受難物語におけるユダの役割もマルコ福音書でのそれに比較すると，その役割が一歩深められ拡張・展開されていると言える．

マタイ福音書におけるユダは，マルコ福音書と同様，イエスの「十二人」の弟子の一人であり，十二人弟子のリストにおいても最後に登場している（マタ 10：4；*Ἰούδας ὁ Ἰσκαριώτης ὁ καὶ παραδοὺς αὐτόν*）．ユダのキーワードとなる「引き渡す」（マタ 10：4, *παραδίδοναι*）[54] については，マルコ福音書にそのまま従っているが，イエス逮捕に関するユダの役割については，マタイではユダ自らが祭司長たちのところへ行き，「あの男をあなたたちに引き渡せば，幾らくれますか」（マタ 26：15）と，裏切りの報酬についての取引を持ちかけている．（ルター訳[55] では，ギリシア語原文の「引き渡す」*παραδίδοναι* を「裏切る／売り渡す／密告する」verraten としている[56]．）いわば，マタイにおいては，ユダがイエス引渡しの役割をより積極的に担うように設定されているのである．報酬として約束された「銀貨三十枚」（v. 15）にはゼカリヤ書 11：12 の預言が下敷きとされており[57]，支配者によって値踏みされた安価な値を象徴的に表現している[58]．マタイでは，ゼカリヤ書の「値踏みした者」（＝羊の商人たち）が「祭司長たち」，そして「値踏みされた者」がイエスとなっており，この対比・対立が受難物語の最後まで続けられる．また，引渡しの取り決めが成立した「そのときから（*καὶ ἀπὸ τότε*）」（v.16）は，マタイにおいて特徴的な「新しい段階の導入句」[59] として機能しており，ユダの裏切り計画がイエスの運命に新たな段階を拓いたことが明確に宣言されている．その意味でも，マタイ福音書においては，ユダの役割がより明確に「イエスを引き渡した弟

子」の起承転結をもったストーリーとして描かれているのである．

最後の晩餐におけるイエスの裏切り予告とユダの反応については，マタイ福音書は基本的にマルコ福音書に従い，食事の最中にイエスが十二人の弟子たちに向かって「あなたがたのうちの一人がわたしを引き渡そうとしている」（*εἷς ἐξ ὑμῶν παραδώσει με*）と告げ，弟子たちがその発言に「心を痛め」（*λυποῦμαι*，マタ 26：22// マコ 14：19），口々に「主よ，まさかわたしのことでは」（*Μήτι ἐγώ* [*εἰμι*], *κύριε*；マタ 26：22// マコ 14：19，ただし［］はマタイ固有）とイエスに尋ねる場面は，マタイ・マルコ共に共通している．ルター訳では，ここは「主よ，わたしですか？Herr, bin ichs?」と（ギリシア語原文の *μήτι* を除いたニュアンスで）極めて肯定的な質問に訳されている．次にマタイは，マルコ福音書にある以下のイエスの言葉をほぼその通り繰り返している．「人の子は（聖書に）書かれている通りに去って行く．だが，人の子を引き渡すその者は不幸だ．生まれなかった方が，その者のためによかった」（*ὁ μὲν υἱὸς* [*τοῦ ἀνθρώπου*] *ὑπάγει καθὼς γέγραπται περὶ αὐτοῦ, οὐαὶ δὲ τῷ ἀνθρώπῳ ἐκείνῳ δι' οὗ ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου παραδίδοται• καλὸν* [*ὖν*] *αὐτῷ εἰ οὐκ ἐγεννήθη ὁ ἄνθρωπος ἐκεῖνος.*）[60] しかし，この後，マタイ福音書においては 25 節のユダとイエスの対話が挿入されている．

イエスを引き渡そうとしていたユダが応えて，「ラビ，まさかわたしのことでは」と言うと，イエスは言われた．「それはあなたの言ったことだ．」	*ἀποκριθεὶς δὲ Ἰούδας ὁ παραδιδοὺς αὐτὸν εὖπεν, Μήτι ἐγώ εἰμι, ῥαββί;* *λέγει αὐτῷ, Σὺ εὖπας.*

日本語訳に新共同訳を引用したが，ルター訳では，ユダの言葉は「ラビ，わたしですか？Bin ichs Rabbi?」と訳され，イエスの答えも「お前の言うとおりだ．Du sagests」となる．ギリシア語原文の「それはあなたの言ったことだ」という表現は，「相手に問いを投げ返すか，間接的に返答を拒否する表現」であるが[61]，ルター訳は明確に「はっきりした肯定」として取っている．つまり，ルター訳のマタイ福音書では，イエスはユダに

「確かにあなたの言う通り，あなたがわたしを裏切る」と宣言している[62]．また，明らかに，イエスとユダとの直接対話を書き加えた福音書記者の意図は，裏切られる者と裏切る者との対比をドラマティックに際立たせ，イエスの裏切る者への預言的発言（v. 24）を強調し，その意味するところを浮き彫りにしていると言えよう．

同時に，マタイ福音書においては，その神学的意図に沿って，イエスの言動は預言の成就として理解されていることが，この場面においても端的に表れている．一連のゼカリヤ書からの預言の引用が，生じた出来事によって成就すると解釈されているように，このイエスの預言的発言も，後にユダが迎えるその悲劇的な最期によって成就することになるのである．…この言葉の後のユダの反応についてはマタイは沈黙しており，引き続き行われた「聖餐の制定」（vv. 26-30）においても，ユダが他の十二人の弟子たちと共に席に着いていたことも否定されてはいない．

しかし，どこかの時点で，ユダが十二人から離れ，「祭司長や民の長老たち」（v. 47）のところに赴き，イエス逮捕の手引きのために手はずを整えに向かったことが推測されよう．47節以下では，マタイ福音書でのイエス逮捕時に，剣や棒を持った大勢の群衆（*ὄχλος πολύς*, v. 47）と共に「（見よ）十二人の一人であるユダがやって来た」（*ἰδοὺ Ἰούδας εἷς τῶν δώδεκα ἦλθεν*）のである．誰がイエス本人であるかを示す合図（＝「接吻する」*καταφιλέω* 行為による挨拶）も既に取り決められており，イエスとユダとのこの世での最後の直接対話がなされる．

ユダはイエスに近寄り，	*καὶ εὐθέως προσελθὼν τῷ Ἰησοῦ εἶπεν,*
「ラビ，こんばんは」と言って接吻した．	*Χαῖρε, ῥαββί, καὶ κατεφίλησεν αὐτόν.*
イエスは彼に言われた．	*ὁ δὲ Ἰησοῦς εἶπεν αὐτῷ,*
「友よ，あなたがなそうとしていることをなすがよい」[63]	*Ἑταῖρε, ἐφ' ὃ πάρει.*

先程のイエスとユダとの直接対話に続いて，逮捕の場面でも，二人が直接

対話するように設定されている．ユダに対するイエスの反応がないマルコの同じ場面と比較すると，確かにマタイ福音書記者はこの場面を意図的に二人の対話となるように設定し直している[64]．しかも，ルター訳では最後のイエスの言葉は「友よ，なぜ来たのか？（Mein Freund, warum bist du kommen?）」である．ルターはギリシア語原文の訳出の可能性のうち「なぜ（何の目的で）」という訳を選んだことが分かる[65]．

逮捕されたイエスは，その晩のうちにいわゆるサンヘドリン（最高法院）として機能した大祭司カイアファの私邸に連行され，そこで「祭司長や民の長老たち」から構成されるユダヤ教当局[66]から有罪判決を受ける（「人々は『死刑にすべきだ』と答えた」マタ 26:66）．翌朝，イエスは総督ピラトの私邸に移されるが（27:1-2），その後にマタイ福音書固有記事として（並行箇所は使 1:18-19）ユダの最期のエピソードがある．

マタイ福音書のユダは，イエスの有罪判決を知って（*ἰδὼν Ἰούδας ... ὅτι κατεκρίθη*，マタ 27:3）「後悔し」（*μεταμεληθεὶς*）[67]，銀貨三十枚を返し（*ἔστρεψεν τὰ τριάκοντα ἀργύρια*），祭司長や長老たちなどのユダヤ教当局と掛け合った弟子として描かれている．イエスの逮捕後に散り散りに逃亡してしまった弟子たちの中では，ペトロとユダだけがその後の当局側との関わりを描かれているのであるが，確かに当局側と渡り合うまでの果敢さをもった弟子はユダ一人であった[68]．ここに，ユダの弟子としての復権を読み取ろうとする解釈は，どこかこのユダの真摯なる後悔（回心）と証言者としての勇敢さにおいて，また，ある意味で「キリスト教的教義」に照らして，あくまでも弟子の一人であるユダを，最大限に慈しみ深く理解しようとする試みであるように思われる[69]．（それは後述するように，バッハ自身の解釈につながると思われる．）ユダの真摯な後悔（「わたしは罪のない人の血を売り渡して，罪を犯しました」*Ἡμαρτον παραδοὺς αἷμα ἀθῷον*, 27:4）と，罪の報酬金の返却意志は，この場面において確かに「祭司長たちや民の長老たち」との頑なさと対比されて描かれている．「血の畑」を購入するのは，使徒言

行録にあるようにユダではなく，マタイにおいては「祭司長たち」(27:6)であり，「血の畑」の原因譚伝承を受け継ぎながら，福音書記者は，ゼカリヤ書預言の引用に沿って，このエピソードの中で「値踏みされた者」であるイエスと「値踏みしたイスラエルの子ら」である祭司長たちに焦点をあてているように思われる[70]．ユダは，銀貨三十枚を返却する弟子として，ここではむしろ，祭司長たちや長老たちの罪の深さを際立たせる役割を担っている．「銀貨を神殿に投げ込んで立ち去り，首を吊って死んだ」(*καὶ ῥίψας τὰ ἀργύρια εἰς τὸν ναὸν ἀνεχώρησεν, καὶ ἀπελθὼν ἀπήγξατο*) という一節から，この弟子の復権まで想定する解釈には無理があるのではないだろうか．マタイ福音書全体からの神学的意図を考慮する限り，ユダはやはり，イエスの預言的な発言の悲劇的成就として，イエスを引き渡した弟子の破滅がその自殺という結末によって締め括られているように思われる．また，復活顕現の場面において，マタイはそこにユダが他の弟子たちと共にいないことも明確に述べている（「さて，十一人の弟子たちはガリラヤに行き」マタ 28:16)．マタイ福音書の物語においては，ユダは悲劇的な自己破滅を遂げた弟子なのである．

3. ルカ福音書におけるユダ像

マタイ福音書よりさらに後代に著されたとするルカ福音書においては，「裏切り者」(*παραδότης*, ルカ 6:16) という言葉が初めてユダに対して使用され，その「十二使徒」リストで明確に提示される．十二使徒のリストにおいて，その中の一人が「裏切り者」であったという宣言がなされる．もちろん，マルコ福音書以来，ユダはイエスを引き渡した張本人であり，使用される *παραδίδομι* に本来「裏切る」という意味が含まれないという事情があるにしても，ユダがイエスを「裏切った」弟子の一人となっていることには変わりがない．しかし，この *παραδότης* という言葉を使用することによって，その「裏切り者」としてのニュアンスがより強調されていることも確かである．

同時に，ユダの行動の背後には，他の共観福音書にはなかった「悪魔」（διάβολος）[71]，「サタン」（σατανᾶς）の動きと連動するものがあったという理解が示される．これはルカ文書において繰り返し提示される神とサタンの力・支配の対比，そして最終的なサタン勢力の敗北という神学的テーマに沿ったものであろう[72]．

マタイ福音書において，ユダがむしろ徹底的にイエスを値踏みしたイスラエルの子である祭司長や民の長老たちと対比されているのに対し，ルカ福音書においては，ユダの心の頑なさはむしろ，イエス自身の最期まで貫かれた弟子たち全員（当然，ユダを含めての）に対する慈しみと対比されているように思われる．それは，最期の晩餐におけるイエスの裏切り予告の場面によく表されている．マルコ・マタイ福音書では，ここにイエスの裏切り者ユダに対する言葉として「人の子を裏切るその者は不幸だ．生まれなかった方が，そのもののためによかった」（マコ 14: 21; マタ 26: 24）があるのだが，明らかにルカはこの言葉の後半をイエスの発言とすることを好まず削除している．例え，自らを裏切る者であっても，ルカ福音書書記者は，イエスにその者を「生まれなかった方がよかった」などとは言わせない．また，引き続く場面においても，イエスは常に「あなたがた」＝「十二人」に向けて，苦労を共にしてきた仲間として語る[73]．相手が自分を裏切るとしても，最期までその相手を仲間として扱う慈しみに満ちたイエス像が浮き彫りにされる．

また，こうしたイエスの態度は，イエスの逮捕時にも描かれている．オリーブ山で弟子たちと共にいるイエスを逮捕しようと「群衆」（ルカ 22: 47, ὄχλος）がやって来るが，その「先頭に立って」（προήρχετο＜προέρχομαι）来たユダに対して，イエスは「ユダ，あなたは人の子を接吻で裏切るのか」（ルカ 22: 48）と語りかける．名前で呼びかけるこの態度に，ルカ福音書で描かれる慈しみ深いイエスが滲み出ているように思われる[74]．同時に，師を裏切るユダとその裏切りさえも受容するイエスのドラマティックなコントラストが効果づけられている．M. ディベリウスは，ここでイエ

スがユダの接吻を受けなかったとしているが，果たしてそうだろうか？このイエス像からすると，ここでは敢えてこの裏切り者ユダの接吻さえも受けたのではないか…と想像するに難くない．

マタイ福音書では，ユダは後悔し自殺して果てるのであるが，ルカ福音書のユダについてはそのような記述はなく，彼はイエスの復活後にも仲間のもとに戻って来なかった弟子となっている．ルカ文書のユダは，「裏切りの報酬」で畑を購入したことが記述されている（使 1: 17-18）．この使徒言行録に用いられている伝承は，恐らくマタイ福音書と同じ「血の畑」原因譚伝承であったと思われるが，ルカ文書では，ユダがこの畑において怪死を遂げたことになっている．その死に様はどこか裏切り者に相応しい「まっ逆さまに落ちてはらわたが出てしまい，体が真ん中から裂けた」（使 1: 18）という謎の死であった[75]．ルカ福音書はユダの後日談を伝承通りに怪死として記述しているが，使徒言行録の書記者の関心は，むしろ，ユダ自身の末路であるよりも，十二使徒の一人の欠落を補完する必要性という事実に焦点があるように思われる．実際，イエスの業を継承すべき者たちとしての十二使徒のリスト（ユダが欠落して十一人となっている）が，使徒言行録の最初にもう一度登場し（使 1: 13），欠落したユダの代わりに使徒を立てるべきであることが主張され，人々はマティアをこの空席を埋める使徒として選出するのである（使 1: 21-26）．

以上，簡単に共観福音書におけるユダ像をマタイ・ルカ福音書に焦点をあてて考察したが，これをまとめると表 1 のようになる（本文末尾の参照資料 I 参照）[76]．いずれにしても，マタイ・ルカ福音書においては，ユダは救いの外にあるように描かれていることは否定しがたい．

4. ルカ福音書の特殊記事—神の憐れみの譬え話《放蕩息子の帰還》

ユダのアリアには，マタイ受難曲であるにも拘らず，その中に使用されている聖書のモティーフとして，ルカ福音書の「放蕩息子の帰還」という

譬え話を下敷きにした言葉が挿入されている．（「見るがいい，殺しの報酬である金を，／戻ってきた放蕩息子は／お前らの足もとに投げ出した．」Seht, das Geld, den Mörderlorn, /Wirft euch der verlorne Sohn /Zu den Füßen nieder!）

ルカ福音書の15章に位置づけられている「放蕩息子の帰還」として有名な譬え話（ルカ 15: 11–32）は，この譬え話の前コンテクストから続く一連の「憐れみの譬え話」の中のひとつであり，ルカ福音書固有のエピソードである．この話には枠組みがあり，徴税人や罪人たちがイエスの話を聞こうと集まっているところを非難したファリサイ派や律法学者たちに向けて，彼らの理解と異なる神の憐れみの真のあり方を説く形で，一連の譬え話（「見失った羊の譬え話」ルカ 15: 4–7，「無くした銀貨の譬え話」15: 8–10，そして「放蕩息子の帰還の譬え話」15: 11–32）がイエスの口を通じて語られている．

譬え話の中には二人の兄弟が登場するが，父親の財産を事前に分けてもらった二人の兄弟のうち，弟はその財産「すべてを金に換え」（*συναγαγὼν πάντα*）；家を出て，「放蕩の限りを尽くして，財産を無駄遣いしてしまった」（*διεσκόρπισεν τὴν οὐσίαν αὐτοῦ ζῶν ἀσώτως*, ルカ 15: 13）．無一文になった時，飢饉が起こって生活ができなくなり，豚の世話をするような卑しい仕事に何とかありつきながら，ひもじさに耐え切れず，ようやく父親の家に帰る決心をするのであるが，消息を絶ったまま失われていた息子の帰還を父親は無条件に喜び，深い憐れみをもって迎え入れ，祝宴をもって人々と共に祝うという話である．

アリアにこの「放蕩息子の帰還」のエピソードが追加されていることの意図は，第一義的には，ユダがこの父親のもとに戻ってきた放蕩息子に重ね合わされているという点では疑いようもない．では，このルカ福音書の「放蕩息子」とは，どのような表象としてここに登場するのだろうか．

結論から述べると，ルカ福音書のこの弟は，自分の犯した過ちを真に後悔して回心し，父親のもとに帰ってきたとはどうも言えない[77]．回心してと言うよりも，むしろ，食べ物がなくて家に帰って来たというのが正し

いのではないか．(「父のところでは，…有り余るほどパンがあるのに，わたしはここで飢え死にしそうだ」*Πόσοι ... τοῦ πατρός μου περισσεύονται ἄρτων, ἐγὼ δὲ λιμῷ ὧδε ἀπόλλυμαι*, ルカ 15: 17)．飢えに耐え切れず，食べ物目当てで帰還したこの放蕩息子に対して，父親の態度は過失を咎めるどころか，とにかく生きて帰還したことにだけで大喜びする何ともありがたい親である．(「憐れに思い，走り寄って首を抱き，接吻した」*ὁ πατὴρ αὐτοῦ καὶ ἐσπλαγχνίσθη καὶ δραμὼν ἐπέπεσεν ἐπὶ τὸν τράχηλον αὐτοῦ καὶ κατεφίλησεν αὐτόν*, ルカ 15: 20)．飢えて帰還した弟にしろ，この帰還した弟のために祝宴をあげる父親に対して拗ねる兄にしても，いずれも父親の真の愛情深さやその無条件の赦しを理解しているとはとても言えないように思われる．このエピソードの中で何よりも焦点とされているは，人間側の後悔・回心や理解とは無関係に，惜しみなく与えられる父親の慈しみである．人間の側の意図がどのようなものであろうと，とにかく自分のもとに戻ってきたことを喜び祝うこの父親は，紛れもない神自身の姿である．ルカ福音書記者が強調して止まないのは，この徹底した神の無限の慈しみであることは間違いない．これら一連の神の憐れみの譬え話においては，失われた側（羊，銀貨，放蕩息子）の落ち度や回心には焦点がなく[78]，神の憐れみ深い愛情，救いの意志が前面に表れているのである．

ルカ福音書の受難物語でのイエスが最期まで弟子たちに対して慈しみ深い愛情を示し続けたように，この神の徹底的・無条件な慈しみ・憐れみというテーマは，ルカ福音書のひとつの特徴であり，福音書全体を流れる重要なモティーフとなっている．

IV．バッハの「ユダ像」解釈の可能性

1．バッハ『マタイ受難曲』におけるユダ像

さて，バッハ自身のユダ像解釈の可能性を探ってみたい．マタイ福音書の記事に従う限り，ユダは救いの外にあるように描かれていることは上記

で確認した．この悲劇的な死を迎える一人の弟子に対して，バッハは，同じくイエスを裏切ったもう一人の弟子，ペトロと対比させている．これは，ある程度，マタイ福音書の記事に沿うものである．マタイ福音書においても，ペトロの否認のエピソードは（マタ 26: 69-75）は，ユダの改悛と自殺のエピソード（マタ 27: 3-10）のほぼ直前に位置づけられている．ここから，伝統的（保守的）な解釈では，ペトロの回心とユダのそれを比較し，「激しく泣いた」ペトロと「自責の念に囚われた」ユダが，一方は真の回心，他方は自殺という，まったく方向性の異なる結果を招いたとする[79]．しかし，これも福音書の記述からは明確には断言できないことである．上述したように，マタイ福音書においてはユダの扱いは，確かにペトロとは異なり，イエスの破滅預言（マタ 26: 24）の成就としての自殺で終わる．しかし同時に，奇妙なことに，ペトロがマタイ福音書の中で名指しで言及されるのは，このイエスの否認エピソードが最後である．「十一人の弟子たち」にペトロが含まれているのは確実だが，この二人の弟子の裏切りエピソードにおいては，いずれも「同等」というニュアンスが漂っているように思われる．バッハも，この点の理解は同じであったのではないだろうか．

a). アリア Nr. 39

二つのアリア（Nr. 39//Nr. 42）を対照してみると，既に述べたように，幾つかの点で特徴的な共通性が浮び上がる．〔1〕．ヴァイオリン独奏（Nr. 39＝第一群の主席ヴァイオリン//Nr. 42＝第二群の主席ヴァイオリンによる独奏），〔2〕．低声部の独唱・アリア（Nr. 39＝アルト・アリア//Nr.42＝バス・アリア），〔3〕．歌詞の構成（リフレインで囲い込みを形成し，その中に「見よ Schaue/Seht」という言葉）．また，第 39 曲（「憐れんでください」）にペトロの否認のモティーフに由来する旋律が隠されて楔が打たれ，さらにペトロとユダの二つの場面を橋渡しするために，ユダの懺悔の言葉（「悪いことをしてしまった．わたしは咎なき血を密告したのだ．Ich habe übel getan, daß ich un-

schuldig Blut verraten habe」）の音型には，第39曲のアルト・アリアの旋律が隠されている[80]．

レチタティーヴォでのペトロの否認（「激しく泣いたund weinete bitterlich」）[81]の後に挿入されるアリアは，アルトで歌われ，ペトロ自身の悔悛（Schaue hier, Herz und Auge Weint vor dir bitterlich）であると同時により聴者一人ひとりの視点へと移動している．

憐れんでください，神よ．	Erbarme dich, mein Gott,
わたしの涙のゆえに．	Um meiner Zähren willen!
ご覧ください，心も目も	Schaue hier, Herz und Auge
御前に激しく泣いています．	Weint vor dir bitterlich.
憐れんでください，神よ．	Erbarme dich, mein Gott,
わたしの涙のゆえに．	Um meiner Zähren willen!

これは全曲中，最も長いアリアでもあり，ロ短調によるシシリアーノ風音楽には，涙のしたたり（もしくはペトロが悔いて自らの胸を打つ）が通奏低音のピッチカートで表現されている[82]．このアリアでは，明らかに流された「涙」／「泣く」に焦点があり，「痛切な悔悟の祈り」[83]を捧げている．そして，2人称で語りかける相手は「わが神 mein Gott」である．同じフレーズ（「憐れんでください，神よ．／わたしの涙のゆえに．」）で囲い込む手法も，アリアNr. 42と同じであるが，確かにここで主体の視点は神に向かっていると言えよう．

磯山は，マタイ受難曲における「三層構造」（「彼」-「われ」-「われわれ」）—それぞれがレチタティーヴォ，自由詩，そしてコラールに対応する—を提示しているが[84]，Nr. 38のレチタティーヴォで客観的に語られる「彼」の視点から，このアリアで「われ」の視点に引き上げられ，体験はペトロ自身のものであるが，礼拝に参加する聴者一人ひとり自身のものとなる．

『マタイ受難曲』は，聖句，自由詩楽曲（ことにアリアと器楽伴奏付レチ

タティーヴォ），コラールの三つの層から組み立てられている．これら三つの層は，それぞれ客観的報告としての「彼」の世界，主体的省察としての「われ」の世界，共同体的応答としての「われわれ」の世界を代表する…バッハの受難曲では，三つの世界に橋が架けられる．「彼」の世界の出来事が「われ」の世界に移り，「われわれ」の世界に受けとめられるという形で，音楽が多層的に進められていくのである．…しかも，バッハにおいては，「彼」から「われ」へ，さらに「われわれ」へという流れの中に，魂の救済へ向けての歩みが象徴されている[85]．

こうして，次の Nr. 40 の大コラール「たとえあなたから離れても Bin ich gleich von dir gewichen」[86] で，より普遍的な視点へと止揚されている．

たとえあなたから離れても	Bin ich gleich von dir gewichen,
きっとまた戻ってきます．	Stell ich mich doch wieder ein;
御子がわたしたちを不安と死の苦しみによって	Hat uns doch dein Sohn verglichen
贖ってくださったのですから．	Durch sein Angst und Todespein.
わたしは咎を否みません．	Ich verleugne nicht die Schuld;
しかし，あなたの恵みと愛は	Aber deine Gnad und Huld
罪よりはるかに大きなものなのです．	Ist viel größer als die Sünde,
たえずこの身に宿る罪よりも．	Die ich stets in mir befinde.

このコラールは嬰ヘ短調から途中（2行目）でヘ長調に変調するが，この明るい雰囲気は歌詞の内容で確信されている「あなたの恵みと愛」の「罪よりはるかな大きさ」による．ここでは，既に人間の罪への悔悛や後悔が，それらを超える，神が御子を通して示された恵みと愛のはかり知れない深さへの感謝へと昇華している．

人間の罪深さに正面から対峙しつつ，それを超えて働く恵みへの感謝・賛美に視点が否応なしに高められていく．「バッハの音楽は，神の前での罪と死の問題をめぐってキリストと『われ』のほかにはだれもいない一対一の格闘と祈りの密室でありながら，その個なる魂の深淵が，共同体として神を賛美する『われら』の世界へ…通じているのである．」[87]

マタイ受難曲全体を貫くテーマとして，磯山は「慈愛」を挙げているが[88]，これにはまったく同感である．特にコラールの中に示されるより反省的・観想的な信仰の視点には，神の限りない優しさや慈しみが溢れ出ているように感じられる．それは，このコラールに詠われるようにキリストの「贖い」において示された神の愛そのものである．「バッハにとってこの世とは，神から離反し，道を見失ってすさみきった罪人の世界である．と同時にしかしキリストによって救われた世界でもある…もし私たちがバッハ芸術の中心主題をたった一つ挙げよと言われるならば，それは十字架であり，十字架にかけられた者なのである…受難曲がバッハの作品の中でひときわ高くそびえる頂点を形成しているのも決して偶然ではない」[89]．しかも，受難曲の冒頭の合唱コラールが示すように，この十字架は雅歌と織り込まれるほどに，神と人間の魂との深い愛の応答に譬えられるほどに，甘美なものなのである．

b)．アリア Nr. 42

さて，このペトロの否認のシンメトリックな対をなすもうひとつのアリア（Nr. 42）にも，同様の視点が盛り込まれていることは疑い得ない．ユダは確かに取り返しのつかない罪を犯した．そして，それを心から後悔した．もしかして，それは，ランバッハの言うように，神への視点へと拓かれなかった自責の念であったかもしれない．（「私のイエスを返してくれ！Gebt mir meinen Jesum wieder!」という叫びは，紛れもなく祭司長たちに向けられており，ペトロの視点とは確かに異なるのである．）A. シュヴァイツァーも指摘するように，このアリア冒頭の序奏は，力強く下降しては跳ね上がる主題を奏でるヴァイオリン・ソロで始まるが，これはユダが神殿にお金（銀貨三十枚）を投げ込んだ時の硬貨が床に跳ね返る音が描写されているという．主題のヴァイオリンの音符三十は，そのまま投げ込まれた銀貨の数に相当し，これは先の祭司長たちの言葉「神殿の金庫に納めるのはまずいEs taugt nicht, daß wir sie in den Gotteslasten legen,」の通奏低音パ

ート部の音符数三十とも符合する[90]．アリア Nr. 39 で，ペトロの涙がピッチカートで示されたように，ここでは三十枚の投げつけられた銀貨の音に焦点があてられている[91]．

このアリアの一（五）行目を歌っている主体がユダであることは冒頭でも確認したが，それでは二〜四行目の語り手は誰であろうか．結論から言うと，アリア Nr. 39 に「われ」の視点が重ね合されているように，アリア Nr. 42 の二〜四行目には「われ」の視点が織り込まれていると思われる．この「われ」の視点がユダを「放蕩息子」と捉えている限りにおいて，そこにユダ弁護が含蓄されていることは否めない．アリアが展開し，二〜四行目の歌詞が繰り返され，増幅される中で，最後にもう一度繰り返される「私のイエスを…」において，本来ユダの発言であったものに「われ」の発言が重ね合わされていくという効果を持っているようである．それはつまり，ユダ（=「彼」）と「われ」が同じ言葉でユダヤ教当局に対して，イエスの返還を要求するというヴィジョンが描かれていると言えるのである．ここでのユダの発言を悶死した彼の想念のロゴス化と捉えるならば，ユダの死後にここでユダ自身が歌っていてもそれ程不自然ではない．ただし，確かにペトロの場合と異なり，ユダの自殺記事とこのアリアの間に祭司長たちの言葉が入るために，すんなりとこのアリアに移行できていないという印象は残る．しかし，これも意図された破格なのではないかと思われる．以下で，ひとつの解釈の可能性を示したい．

バッハがこのペトロとユダのアリアを対（シンメトリー）として位置づけている意味は，いずれにしても人間は罪深い存在であり，キリスト・イエスは「わたしたちの罪のために死んだ」（Iコリ 15: 3）ということを徹底的に極めた考察とは言えないだろうか．これは，例えば，最後の晩餐で裏切り予告をしたイエスに向かって弟子たちが口々に「主よ，私ですか？ Herr, bin ichs?」（第 9 曲 e）に間髪入れず第 10 曲のコラール「私です，私こそ償うべきです．Ich bins, ich solte büßen,」で止揚される部分にも端的に表現されている．マタイ受難曲の中で，バッハは人類の罪というも

のを真摯に正面から向き合って，「われ」の問題として捉えている．それは，さらにもう一歩深められた共同体の「われわれ」の次元においては，むしろ神の恵みと愛への賛美・感謝へと昇華されているが，コインの裏表のように，人類の罪の問題と神の恵みは分かち難く，ひとつのリアリティの両面を成しているのである．これは，冒頭合唱での「ご覧なさい！—何を—その忍耐を．Sehet! —Was?—seht die Geduld, / ご覧なさい！—どこを—私たちの咎を．Sehet!—Wohin?—auf unsre Schuld; 」の並列，およびこの二部合唱に垂直に介入してくるコラールの歌詞（「あなたはいつも忍耐を貫かれた．…あなたはすべての罪を背負って下さった．Allzeit erfunden geduldig, ...All Sünd hast du tragen,」）にも表現されているように思う．

この関連で，第27曲ab（イエス逮捕の場面でのアリアとコーラス）を考えると，「放せ，やめろ，縛るな！　Laßt ihn, haltet, bindet nicht!」(27a) で介入してくる第二群の合唱（「信ずる者たち」）に表現されているイエス逮捕に対する不安と動揺が，次の「業火の淵を開け，おお地獄よ／砕け，滅ぼせ，呑み尽くせ，踏みしだけ／突発する怒りで／不実な密告者，人殺しのやからを．Eröffne den feurigen Abgrund, o Hölle,/ Zertümmre, verderbe, verschlinge, zerschelle/Mit plötzlicher Wut/ Den falschen Verräter, das mördrische Blut!」(27b) での第一群・第二群両者による畳み掛けるような激しさをもってエスカレートする怒りの叫びにエスカレートするが，この怒りは，明らかにユダ（「不実な密告者 Den falschen Verräter」）に向けられている．これが当時のユダ理解に関する通念であったに違いない．しかし，この怒りの反応とそこに含まれる裏切り者ユダへの憎悪に対しては，次に控える大コラール第29曲「おお人よ，お前の大きな罪を嘆くがよい O Mensch, bewein dein Sünde groß,」がより高い視点からの考察を与え，その反応を止揚しようとしているように思われる．すなわち，合唱が表現する人間的な感情や理解のレベルでは，イエスの逮捕は「密告者」・「人殺し」のせいとされ，ユダは憎悪の対象となりがちであるが，果たしてそうであるかという疑問が呈されているように聴こえるのである．

ここでの二重奏付き合唱の部分は，「イエスの歩みを見守っての報告と反応であること，二つの演奏グループの対比を生かしていること，ホ短調を基調とすることなど種種の点で，冒頭合唱曲と対応する性格を有している」[92]．ピカンダーの台本では，この曲が第一部の最後に置かれていた—それは劇的な第一部終了部分としては効果的であったに違いないが—ものを，バッハはさらにレチタティーヴォ（第28曲）と大コラール（第29曲）を付けて終了させたことからも，バッハは意図的に第27曲が第一部の終了場面となることを避けたかった．つまり，第28・29曲には，バッハの反省・考察が表れていると見ることはできないであろうか．もし，この考えが可能であれば，明らかにバッハは，怒りの対象を「われ」の外に向ける人々に対して警告しているように思う．

この自分自身の罪深さの認識—しかも，ユダという別個の対象ではなく自分という存在の罪深さの認識—という視点が，アリア Nr. 42 に通じているように，筆者には感じられる．ユダに対する同情というだけでなく，ユダは自分自身でもありうる．（この点で，ランバッハのユダ解釈にはバッハのユダ解釈に通じる同じ説得力がある．）罪深さという点において，人間は誰もそれほど大差はなく，ペトロもユダも同じように人間の罪深さをあらわしている．そして，両者は同じように自分の犯してしまった過ちに気づき，心から後悔したのである．このように罪深い人間に対して，神の慈しみは惜しみなく与えられる，そして人間は最終的には神の恵みによって救われるしかないのだという認識．それが，このユダのアリアには溢れ出ているように思われるのである．

ペトロのアリアの後で，Nr. 40 のコラールが，後半部分で明るい変調によって人の罪を遥かにこえる神の恵みと愛を謳いあげるが，Nr. 42 に不思議な明るさをもった長調が用いられているのは，ユダもペトロと同じように神の恵みのうちにある，という主張が込められているからではないのだろうか．また，少し先に控える Nr. 44 のコラール（「お前の道と／心のわずらいを／誠かぎりない護りに委ねなさい Befiehl du deine Wege/ Und was

dein Herze kränkt/ Der allertreusten Pflege」）をも含めて，ユダのアリアを止揚することが可能であれば，神の慈しみは誰にも―もちろん，ユダにも―及ぶということを深い確信と信頼をもって謳いあげているようである．

V．結び

マタイ福音書において，福音書記者の神学的意図に従うならば，ユダは確かに裏切り者であり，イエスの預言通りに自滅する悲劇的なひとりの弟子として描かれている．しかし，この聖書テクストと対峙するわれわれ読者が，自らの人生をテクストに織り込み，自由に物語を想像する「余地・間・隙間」が，この聖書テクストの中にはある．アウエルバッハによれば，これが聖書テクストの持つ「光と影の際立った対照，断続性，表現されないものを暗示する力，背景をそなえた特性，意味の多様さと解釈の必要」といった特長なのであろう[93]．そして，このテクストの隙間に入り込み，豊かに育まれるわれわれの自由な想像力によって，人の心に感銘を与え続けるような，どれほど多くの文化的創造物が生み出されてきたことであろうか．バッハが，聖書テクストに表れるユダという表象との格闘・対話を通して，ひとつのアリアの中に織り込んだ彼自身の深い洞察は，自分自身と同じ罪人であるひとりの人間ユダであり，この悲劇的な弟子の運命に対してさえも注がれる神の慈しみと恵み深さへの確信であったと思う．時代を超えてバッハが現代のわれわれに訴えかけてくる真実性は，彼自身が示した人間性の理解であり，神の変わらない「優しい眼差し」への信頼であったのではないだろうか．人生の伴侶として，人間にインスピレーションを与え続ける背景をそなえた聖書テクストは，人間の体験が多層的に塗りこめられているがゆえに持つひとつの力なのであり，その断続性の中から時代を超えた真実性を汲み出す鍵は，聖書を読むわれわれ読者の自由な想像力の中にある．

補遺：【図像の中のユダとペトロの対比】

バッハのユダ像を探ってきたが，このようなユダ理解・解釈は，果たして時代を先んじて例外的なものであったのであろうか．ある程度，同時代の神学者，そして一般大衆の歌などから，このような「ユダの復権」に近いユダ解釈は既にバッハの時代にもあったことを示したが，図像学的に見て，これをさらに補強する一群の作品集がある．

この意味で，荒井献著の『ユダとは誰か―原始キリスト教と「ユダの福音書」の中のユダ』に併載されている石原綱成の「ユダの図像学」は非常に興味深い内容である[94]．ユダが図像学的にどのように表象されてきたかを分かりやすく説明している．冒頭で印象的であるのは，ヨーロッパにおいて，ユダが裏切り者として十二使徒の中でも特殊な様相で一目で判別できるように描かれるのは確かだが，「それにもかかわらずユダは，異邦人として描かれることはないし，たとえ悪魔が彼の横にいても，ユダ自身が悪魔として描かれることはない」[95] というコメントであった．あくまでもユダとは，イエスに選ばれ愛された十二使徒の一人なのである．

また，同書で紹介されているものに，「祈念図（もしくは敬虔図 Andachtsbild）」と呼ばれ，14 世紀にイタリアを起源として始まり，イエスの受難の場面を強調して，イエスの受難の苦しみを追体験するように描かれている絵画である[96]．そのうち，「キリストの武器（arma Christi）」と呼ばれるものには，「鞭打ちの柱，槍，梯子，イエスの衣，葦の棒，…釘抜き，金槌，紐，三本の釘，そして…ユダの銀貨三十枚」[97] など，受難の象徴す

図 2（部分）

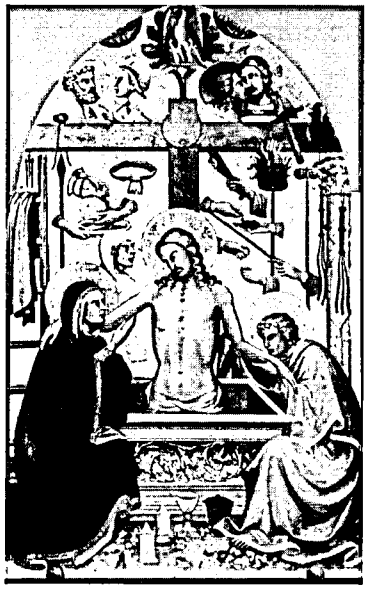

図3

図4

る物品が描かれている．こうしたタイプの図像は，後にドイツ上部ライン地方に伝えられ，そこで新たな宗教画のジャンルを発展させるのであるが，石原の下記の指摘は，この小論との関連では注目に値しよう．

> このジャンルの図像で特筆すべき点は，ユダとペトロの否認とが一つのグループとして描かれていることである．ロレンツォ・モナコの板絵〔図2〕[98]〔図3〕[99]は，十字架の袖木にペトロの否認とユダの接吻とが左右対極に描かれている．フラ・アンジェリコの例作〔図4〕[100]では，十字架の画面右側に目隠しされて暴行を受けるキリストと，銀貨三十枚を受け取るユダの手があり，左側にはユダの接吻とペトロの否認が描かれている．この種の図像では，ユダ，ペトロは欠かせない要素となっているのである．…中世末期には，画家がペトロの否認の中にユダのそれを同様の罪を見出していたことも確かなのである[101]．

人々の黙想というレベルでは，福音書の記述を超えて，人間存在の罪深さ

そのものへの内省が表れていると言えないであろうか．石原の結論としては，図像を見る限りではこれらの図像は，「人間が罪深い存在であることを徹底的に自覚させることを主眼としているもの」であり，「罪を見つめ，『キリストは，聖書に従って，私たちの罪のために死んだ』というコリント人への第一の手紙十五章3節を明確に意識させる図像だということである」が，「自分を裏切ったユダでさえ赦すイエスは見出すことができず，あるいはもっと広く図像学的にはそのような解釈を映したものは存在しなかったといった方が無難なのではないか」と述べている[102]．

こうした図像が描かれた約二世紀後に，バッハはその「存在しなかった」解釈を音楽の中で表現した．だからこそ，時代を超えて，バッハの音楽がわれわれの胸に深く迫るものがある，ということができるのではないだろうか．

【『マタイ受難曲』におけるピカンダー／バッハのアリアの配置と構成】

《説教前》

[1]　**シオンの娘と信ずる者たち**（Nr. 1）
　　アリアとコラール（→冒頭合唱曲）

[2]　女がイエスに香油を注ぎかけたとき
　　レチタティーボとアリア（→第5〜6曲，アルト）

[3]　ユダが銀貨三十枚を受け取ったとき
　　アリア（→第8曲，ソプラノ）

[4]　イエスが晩餐を催したとき
　　レチタティーボとアリア（→第12〜13曲，ソプラノ）

[5]　イエスがオリーブ山でおののかれたとき
　　シオンの娘と信ずる者たち（Nr.20）
　　レチタティーボとアリア（第19〜20曲，テノールと合唱）

[6]　「しかし私の願い通りではなく，御心のままに」という言葉のあとで
　　レチタティーボとアリア（第22〜23曲，バス）

[7]　イエスが捕われたとき
　　シオンの娘と信ずる者たち（Nr. 27）
　　アリアと合唱（→第27曲ab，二重唱と合唱）

《説教後》

[8]　**シオンの娘たちと信ずる者たち**（Nr. 30）
　　アリア（→第30曲，アルトと合唱）

[9]　「しかしイエスは黙っていた」の言葉のあとで
　　レチタティーボとアリア（→第34〜35曲，テノール）

[10]　ペトロが泣いたとき
　　アリア（→Nr. 39，アルト）　……「ペトロのアリア」

[11]　「…まずい．これは血の価いなのだから」の言葉のあとで
　　アリア（→Nr. 42，バス）　……「ユダのアリア」

[12]　「この人がいったいどんな悪いことをしたのか？」というピラトの言葉のあとで
　　レチタティーボとアリア（→第48〜49曲，ソプラノ）

[13]　イエスが鞭打たれたとき
　　レチタティーボとアリア（→第51〜52曲，アルト）

[14]　キレネ人シモンが十字架を背負わされたとき
　　レチタティーボとアリア（→第56〜57曲，バス）

[15]　イエスが十字架につけられたとき
　　シオンの娘と信ずる者たち（Nr. 60）
　　レチタティーボとアリア（→第59〜60曲，アルトと合唱）

[16]　イエスが十字架から下ろされたとき
　　レチタティーボとアリア（→第64〜65曲，バス）

[17]　「石に封印をした」という言葉のあとで
　　シオンの娘と信ずる者たち（Nr. 67）
　　レチタティーボとアリア（→第67〜68曲，四重唱と合唱）

参照資料Ⅰ「福音書におけるユダ像の概要」

	マルコ福音書	マタイ福音書	ルカ福音書	ヨハネ福音書
ユダの描写	「十二人」「使徒」 「引き渡す」*παραδίδωμι* 「十二人の一人」(14:10)	「十二使徒」 「引き渡す」*παραδίδωμι* 「十二人の一人」(26:14)	十二使徒の一人 「引き渡す」*παραδίδωμι* 「裏切り者」*προδότης* (Lk 6:16) 「十二人の中の一人」(22:3)	「引き渡す」*παραδίδωμι* 「あなたがたのうちの一人」(13:21)
内通	金を与える約束 (14:11)	「報酬の要求」(銀貨三十枚) (Mt 26:14-16)	「悪魔」*διάβολος* (4:2,3,6,13) 「サタン」への言及 (*σατανας* 22:3)	「悪魔」*διάβολος* 「サタン」*σάτανας*
裏切り予告	「生まれなかった方が良かった」 (Mk 14:21)	「生まれなかった方が良かった」 (Mt 26:24)	左一文を削除 イエスの態度は慈愛に満ちている 「あなたがた」=12人 (22:25, 28, 30)	イエスは十二人の足を洗う 「サタンが彼の中に入った」 ユダ出てゆく.「夜であった.」
香油	「何人か」(ユダではない)	「使徒たちは」(ユダではない)		「ユダ」(=「盗人」) の言葉
逮捕時	接吻で合図.「ラビ」	接吻で合図.「ラビ, こんばんは.」 「友よ, ...」	ユダが先頭. 接吻で挨拶. 「ユダ, あなたは接吻で ...」	闇の側にいるユダ.
逮捕後	(言及なし)	後悔, 返金, イエスの釈放を交渉. 首吊り自殺.「血の畑」(Ἀγρὸς Αἵματος)		(言及なし)
復活後	(Cf. 1 Cor 15:5)	「十一人」に顕現	仲間のもとへ戻らなかった. 購入した畑で怪死.「血の土地」 (Χωρίον Αἵματος) 「十二使徒」補充 (Cf. Act 1:13)	(言及なし)

【マルコ福音書の場合】
- ○ 一貫して「引き渡す」(*παραδίδωμι*) を使用.
- ○ 十二人の一人が引き渡したという役割を設定しているが, まだ「裏切り者」として糾弾するようなニュアンスはない.
- ○ 1コリ 15:5との関連では, ユダを含めた十二弟子にイエスが顕現したという伝承もあったのではないか.

【マタイ福音書の場合】
- ○ マルコの「引き渡す」(*παραδίδωμι*) を使用.
- ○ 十二人の一人が引き渡したという役割をり積極的に担うようになっている. (報酬の要求.)「裏切り者」としてのニュアンスが入る.
- ○ しかし, 罪を自覚し, 後悔し, 返金した点で, イエスが逮捕後にも当局側に掛け合った唯一の弟子となっている.
- ○ ユダの自殺.「血の畑」の伝承.
- ○ 復活のイエスは, ユダを除く十一人に顕現.
- ○ 可能性として, 十二人への顕現という伝承を避けたかった?

【ルカ福音書の場合】
- ○ マルコの「引き渡す」(*παραδίδωμι*) をより一歩深めた「裏切り者」*προδότης* を使用.
- ○ 明確に, 十二人の一人が「裏切り者」であったという設定となる.
- ○ しかし, ユダの行為の背後には「悪魔」「サタン」の動きがあったのだ, という理解. 神とサタンの力を対比するルカ神学に沿っている.
  Cf. ルカ 4:13; 10:18-20; Acts 26:17-18.
- ○ イエスの優しい態度が対比される.
- ○ ユダは「離れて行って戻らなかった弟子」.
- ○ ユダの怪死についての伝承を知っていた?
- ○ 使1:13でもう一度使徒のリストが出る.「十二使徒」の継続, マティアが加わることがルカにとっては重要.

【ヨハネ福音書の場合】
- ○ マルコの「引き渡す」(*παραδίδωμι*) を使用.
- ○ 十二人の一人が「悪魔」であったという設定.
- ○ ルカ同様, ユダ自身とのその行為は,「光」に対する「闇」としての「悪魔」「サタン」の動きを想定している.「光」vs.「闇」という二元論的なヨハネ神学に沿う.
- ○ また, セクト主義的なヨハネ福音書の「内」と「外」の区別において, ユダは「内」にいたが, もともと「外」(「ユダヤ人」) に属する者として描写される.
- ○ ユダの悪人性を強調する. (盗人 ...) だから, 裏切り者ではなく, 最初から仲間でなかった別物. Cf. ヨハ 8:39-47

伝承の発展傾向として, ユダが「裏切り者」として設定されるのと同時に, マリアがより聖なる存在として描かれるようになる. (誕生物語).

注

1) 磯山雅『マタイ受難曲』東京書籍，2006年[8]，320-321頁／同書，Nr. 42 Aria「〈マタイ受難曲〉対訳」19頁．『マタイ受難曲』の曲番号の付け方には，BWV—W. シュミーダー編『バッハ作品目録』(1950年) —と，NBA—新バッハ全集版 (1973年) —があるが，ここでは，NBAによる曲番号を採用している．BWVによると，このユダのアリアは第52番となる．

2) 音楽学者でありバッハ研究家．*Johann Sebastian Bach* (1880) は19世紀のバッハ研究として貴重な資料となっている．

3) 磯山雅，前掲書，323頁．磯山氏は，他にもアルフレート・ホイスの解釈，すなわちこれが「イエスを救おうとする勇気ある一人の弟子」であるとする説などを例示している．

4) その場合，より抽象化されたアリアという印象が強まるように思われるのであるが．

5) ロストック大学教授であり，教区監督でもあった神学者．磯山雅，前掲書，99頁．

6) Ibid., 323頁．

7) Ibid., 322頁．

8) バッハの『マタイ受難曲』という作品資料として，最も重要な1736年の自筆総譜はベルリン国立図書館に保存されている．これは，19世記におけるバッハ復興を起こしたメンデルスゾーンの「マタイ受難曲の再演」(1829年) の契機となった歴史的資料であるが，『マタイ受難曲』は既に1729年に上演されているために，バッハは1736年までの7年の間にこの受難曲に手を加えていたことが判明している．(ただし，近年の研究では，『ヨハネ受難曲』の5年後の1729年の聖金曜日が初演という説に代わって，1727年に既に初演されていたというのが定説になりつつある．Cf. 磯山雅，前掲書，67頁．) 従って，1729年の上演時に使用された別の総譜も存在することになるのだが，残念ながら，このより古い自筆総譜は失われている．しかし，バッハの愛弟子であった (後に娘婿となる) ヨハン・クリストフ・アルトニコルがこの自筆譜をコピーしたものが伝えられており (いわゆる「アルトニコル筆写譜」)，二つの総譜の間には様々な異同が確認される．磯山雅，前掲書，67，74-80頁．三宅幸夫「礼拝音楽を超えた破格の表出力」，『J. S. バッハの音楽宇宙』音楽ブックス11，現代社，1985年，125-128頁．

9) 磯山雅『バッハ—魂のエヴァンゲリスト』，東京書籍，1985年，174頁．杉山好「プロテスタンティズムの音楽家バッハ」，『聖書の音楽家バッハ—《マタイ受難曲》に秘められた現代へのメッセージ』音楽の友社，2000年，77頁．

10) 杉山好「マタイ受難曲理解のための覚書」，『聖書の音楽家バッハ』所収，178頁，脚注2．

11) 磯山雅，前掲書，89-91頁．アルフレード・ホイス（杉山好訳）「『マタイ受難曲』理解のために」『J.S. バッハの音楽宇宙』音楽ブックス11，現代社，1985年，138-139頁．

12) アルフレード・ホイス，前掲書，135-136頁．

13) 三宅幸夫，前掲書，130頁．

14) ライプツィッヒの中央郵便局に勤務していた公務員であり詩人．

15) 「われらの主イエス・キリストの受難，福音書記者マタイによる．ヘンリーツィ氏，別名ピカンダーによる歌詞．G. S. バッハの音楽．第一部．」（G. S. バッハとしたのは名前のイタリア風読みによるもの．）磯山雅，前掲書，67頁．

16) とは言え，受難曲全体を構成する聖句・コラール・自由詩楽曲のうち，ピカンダーが独自に書き下ろしたのは，自由詩楽曲のみで，彼がコラール選曲に影響を及ぼしたわけでもなく，その意味では彼の役割は極めて限定されたものであった．磯山雅，前掲書，83頁．

17) このもとになったのは，1725年に作曲され出版された最初の受難曲歌詞『受難するイエスに寄せる，緑の〔洗足〕木曜日と聖金曜日の教化的考え』（Erbauliche Gedancken Auf den Grünen Donnerstag und Charfreytag über den Leidenden JESUM）であるが，これは聖書を離れたマドリガル形式の韻文である．「シオンの娘たち」や「信ずる者たち」は登場するものの，相互に対話することもない．

18) 末尾の「『マタイ受難曲』におけるピカンダー／バッハのアリアの配置と構成」参照のこと．

19) 杉山好「《マタイ受難曲》理解のための覚書」，『聖書の音楽家バッハ《マタイ受難曲》に秘められた現代人へのメッセージ』所収，音楽之友社，2000年，162頁．

20) 聴者から見て左手．

21) しかも，ペトロのアリアのヴァイオリン独奏は第一群の主席ヴァイオリンがソロを弾き，ユダのアリアの場合は，第二群の主席ヴァイオリンがソロを弾く．杉山好，「《マタイ受難曲》における象徴表現と現代」，前掲書，32-33頁．

22) ホイス，前掲書，139頁．

23) 冒頭合唱曲のコラールと，第19曲のアリオーソに組み込まれたものを別とすると，13曲であり，これは象徴的に受難の13留（stations）を意味しており，また13曲目はまさに十字架上でイエスが息絶えた瞬間に歌われるようになっている．〈いつかわたしが世を去るとき Wenn ich einmal soll scheiden, Nr.62〉杉山好，「《マタイ受難曲》理解のための覚え書」，前掲書，172-173頁．

24) 磯山雅，前掲書，115-116頁．また，以下参照．「作曲者のほうからすれば，劇中のどこにどういったコラールを配するかが，まさしく自分の芸術的センスと

会衆共同体への責任感と思いやりと，そして聖書記事とコラールを結びつける霊的呼吸と信仰的釈義の冴えとを一挙に試される，ある意味では実にこわい，しかしある意味では実にチャレンジのしがいのある試金石であった．そして，バッハはこの点でずば抜けたコラールの芸術家であったといってよいであろう．」杉山好，前掲書，172頁．

25) ニコラス・デーツィウス作曲（1522年）．(Nikolaus Decius, 1485頃-1546以降)．

26) 磯山雅，前掲書，118頁．

27) 冒頭合唱曲に織り込まれたニコラウス・デーツィウスの〈おお神の小羊，罪なくしてO Lamm Gottes unschuldig〉(1531年)，および掉尾に置かれたゼーバルト・ハイデンの〈人よ，お前の大きな罪を嘆くがよいO Mensch, bewein dein Sünde groß〉．

28) 大貫隆（編著）『イスカリオテのユダ』，日本キリスト教団出版局，2006年．ウィリアム・クラッセン『ユダの謎解き』，森夏樹訳，青土社，2007年．荒井献『ユダとは誰か　原始キリスト教と「ユダの福音書」の中のユダ』，岩波書店，2007年．荒井献『ユダのいる風景』，現代のカルテ双書，岩波書店，2007年．他にも，利倉隆『ユダイエスを裏切った男』，平凡社新書324，2006年．また，2007年6月28〜29日に東京国際フォーラムで行われた聖書フォーラム〔日本聖書協会主催〕においても，招聘されたチャップマン大学の聖書学者のマービン・マイヤー（Marvin Mayer）が「初期キリスト教文献が片隅に追いやった二弟子の復権—イスカリオテのユダとマグダラのマリアユダとマグダラのマリア」について講演している．

29) 例えば，新約外典として，『ペトロ行伝』第8章，『使徒ユダ・トマスの行伝』第32章，『ピラト行伝（ニコデモ福音書）』補遺一および二，『(アラビア語）イエスの幼児物語』，『バルトロマイ福音書』断片，『アンデレとパウロの行伝』など．死後にユダの魂が陰府（または地獄）に留め置かれ，そこに降下したキリストさえもユダ（そしてヘロデとカイン）の魂はそこに取り残した，とある．また，教父文書として，パピアスによる断片（ここでのユダの死様の描写は並大抵ではない醜悪さが漂う）『ポリュカルポスの殉教』第6章，オリゲネス『ケルソス駁論』第二巻，11，12，18，20章（ただし，オリゲネスはユダの裏切りについては寛容な姿勢で描き，むしろ彼の後悔にはイエスの教えの浸透がしめされているとする)，ヨアンネス・クリュソストモス『マタイ福音書講解説教』，アウグスティヌス『ヨハネによる福音書講解説教』『神の国』．Cf. 大貫隆，前掲書，35-47，60-87頁．

30) 荒井献，『ユダのいる風景』，63頁ff．一方では，「イスカリオテ」をシカリ派（もしくは熱心党）と解釈する立場で，ユダがその思想ゆえに抱いた政治的幻

想のために師であるイエスを裏切ったとする説（J. クラウスナー『ナザレのイエス』，J. ブリンツラー『イエスの裁判』，O. クルマン『イエスと当時の革命家たち』，S. G. F. ブランドン『イエスとゼーロータイ』，J. カーマイケル『キリストはなぜ殺されたか』など）があり，他方では「愛憎説」としてユダの嫉妬など心理的に両義的なイエスに対する複雑な感情が師を裏切らせたとする説（J.E. ルナン『イエス伝』，F. モーリャック『イエスの生涯』，井上洋治『わが師イエスの生涯』など）がある．また，大貫隆『イスカリオテのユダ』，195-228 頁．

31) ウィリアム・クラッセン，前掲書，48 頁．

32) 荒井献，前掲書，55-58 頁．荒井は，1460 年ごろにスイスのルツェルンで初演された受難劇を例示している．また，この紙面上では，福音書と反セム主義（反ユダヤ主義，anti-Semitism）の問題およびその歴史的経緯については取り扱うことができないが，マタイ福音書では，27: 24-25 に，イエス裁判において「その血（イエスの死）の責任は，我々と子孫にある」という句を挿入し，イエス処刑の責任を（ローマ帝国側ではなく）ユダヤ人に帰す．この一節は，マタイ共同体（当然，そこにもユダヤ人が多数含まれる）とユダヤ人共同体の反目を背景としていたが，後代にこれがユダヤ人一般に「キリスト殺し」の汚名を着せる根拠となった．

33) Ibid., 62-63 頁．

34) 前述の通り，これは宗教改革期に遡るコラールである．

35) Cf. George W. E. Nickelsburg, *Ancient Judaism and Christian Origins—Diversity, Continuity, and Transformation*, (Minneapolis: Fortress Press, 2003), 208, n. 2. "For the ongoing emphasis on this tradition, see ibid., 92-106. A striking exception on this appears in Bach's *St. Matthew Passion*, where the interpolations into the biblical narrative focus on humanity's (and especially Christian's) responsibility for Jesus' death and leave without comment or emphasis the Gospel's references to the Jews and their leaders."

36) 磯山雅，『マタイ受難曲』，109 頁．「受難するイエス（Der leidende Jesus）」，『ヨセフの破滅に抗する福音の予防（Evangelisches Praeservativ wieder den Schaden Josephus）』所収（1681）．

37) Ibid., 99-114 頁．エルケ・アックスマッハーの以下の文献に拠る．E.Axmacher, *—Aus Liebe will mein Heyland sterben—Untersuchungen zum Wandel des Passionsverständnisses im fiühen 18. Jahehundert.*-Neuhausen & Stuttgart. 1984/ idem, "Ein Quellenfund zum Text der Matthäus-Passion," *Bach-Jahrbuch* 54, pp. 181-189, 1978.

38) Ibid., 324 頁．

39) Ibid., 110-111, 328 頁．しかし，この受難考察と日曜礼拝での説教は既に

1721年にイェーナで開始され，彼がハレに転任した後も続けられた．肝心のユダ論が出てくる「世の裁きについて」は1722年とされている．

40) Ibid., 329-330頁.

41) Ibid., 37-38頁.

42) Ibid., 43-44頁.

43) Ibid., 44頁．Cf. シリア語圏で広く普及したタティアヌス（Tatianos）による「ディアテッサロン（*Diatessaron/ to dia tessarōn euaggeliōn*）」(ca.170) などは，その最も早い時期の例である．これはシリア語圏では5世紀まで，ここの福音書の代わりに一般に用いられ，エフライム（Ephraim of Syria）が「ディアテッサロン注解」を著した．

44) Ibid., 44頁.

45) Ibid., 65頁．杉山好「裏側から見たバッハ」,『聖書の音楽家バッハ』所収，43-52頁.

46) 大貫隆『マルコによる福音書』日本キリスト教団出版局，1993年，7-9頁．廣石望「マルコによる福音書」，大貫隆・山内眞監修『新版 総説 新約聖書』所収，日本キリスト教団出版局，2003年，58-60頁．G. タイセン『新約聖書 歴史・文学・宗教』大貫隆訳，教文館，2003年，143頁.

47) あるいは，ユダを含めた十二人への，イエスの顕現という伝承が存在した可能性も排除はできないが，これは推測の域を出ない．

48) 詩篇41：10「わたしの信頼していた仲間，わたしのパンを食べる者が威張ってわたしを足蹴にします」（新共同訳）．イエスに重ねられ解釈された「嘆き」の詩篇として，詩篇22, 41-43, 51, 69, 109 etc. を参照のこと．また，第二イザヤ書の「主の僕の歌」(Is 42, 49, 50, 52-53) など.

49) 大貫隆『イエスという経験』，岩波書店，2003年，133-138頁.

50) この小論においては，マルコ福音書やヨハネ福音書のユダ像は取り扱わないのであるが，一応比較のために該当の並行箇所は挙げておいた.

51) ルカ文書は福音書と使徒行伝（使徒言行録）が元来ひとつの作品として著されたものであるため，福音書のみを比較することは不適切であるかと思われる．事実，ユダに関する記述は，福音書後半から使徒行伝の最初に亘っており，この関連の中で理解されるべきあろう．Cf. 加藤隆「第二章 ルカによる福音書」(109 - 133頁)，山田耕太「第四章 使徒言行録」(162-183頁)，大貫隆・山内眞監修，『新版 総説 新約聖書』 日本キリスト教団出版局，2003年.

52) Griesbach-Farmer Hypothesis のように，マルコ福音書よりもマタイ福音書の先行性を主張する学説もあり，近年のアメリカにおいては，史的イエス問題に関するQ資料の重要性との兼ね合いで，再びマタイ福音書の先行性が取りただされているが，定説としての二資料仮説（マタイ固有資料とルカ固有資料を併せ

て考慮する場合，厳密には四資料仮設と言った方が正しいのかも知れないが）は揺らいでいないと言えよう．Cf. John P Meier, *A Marginal Jew: Rethinking the Historical Jesus, vol. 2: Mentor, Message, and Miracles*, (New York: The Anchor Bible Refrence Library, Doubleday, 1994): 177–181, f.270 in 231.

53) 小河陽「マタイによる福音書」，大貫隆・山内眞監修『新版総説新約聖書』，日本キリスト教団出版局，2003年，93–94頁．小河陽『マタイによる福音書　旧約の完成者イエス』講談社，1983年，17–18，61–75頁．

54) ユダに関して「引き渡す」が使用されている箇所は他にも，マタ 10: 4; 26: 15, 23, 24, 25, 46, 48; 27: 3–4.

55) ただし，マルティン・ルターがドイツ語に翻訳した聖書原典に関しては，一般的にエラスムス版ギリシア語ラテン語訳版が底本とされているのであるが，その原典も異読・異稿の可能性を排除できず，また底本は確定できないとする説もある．有名な1522年9月の初版（いわゆる Septembertestament）以降，ルターは死ぬまで翻訳の改訂を重ねていくが，1581年にザクセン選帝侯アウグスト一世により決定版は1545年（ルターの死の前年）版とされた．この小論でのギリシア語テクストは Nestle-Aland 第27版であるので，細部の比較が成立するかどうかについては，問題がないわけではないことを予めお断りしておきたい．Cf. 田川健三『書物としての新約聖書』勁草書房，1998年，518–522頁．

56) Nr.7 "Judas: Was wollt ihr mir geben? Ich will ihn euch verraten."/ Evangelista: ...Und von dem an suchte er Gelegenheit, daß er ihn verriete."// Nr.11 "Jesus: Der mit der Hand mit mir in die Schüssel tauchet, der wird mich verraten. ...doch wehe dem Menschen, durch welchen des Menschen Sohn verraten wird!"// Nr. 26 "Evangelista: ...Und der Verräter hatte ihnen ein Zeichen gegeben und gesagt..."// Nr. 41a "Evangelista: ...Dad as sahe, Judas, der ihn verraten hatte,..." なお，「裏切る・売り渡す」は杉山訳，「密告する」は磯山訳．

57) ゼカ 11: 12「彼らは銀貨三十シェケルを量り，わたしに賃金としてくれた．」「銀貨三十枚」となるのはLXX．マタイの受難物語においては，5つのゼカリヤ書からの預言が引用されている．マタ 11: 5// ゼカ 9: 9; マタ 24: 3// ゼカ 19: 4; マタ 24: 30–31// ゼカ 2: 6; マタ 26: 28// ゼカ 9: 11; マタ 27: 3, 9// ゼカ 11: 12–13. Cf. W.F. Albright and C. S. Mann, *The Anchor Bible Matthew*, (Garden City, New York: Doubleday & Company, Inc., 1971): 316–317; Benedict T. Viviano, O. P. "The Gospel According to Matthew," in *The New Jerome Biblical Commentary*, (New Jersey: Prentice Hall, 1990): 669–670.

58) 荒井献は，このユダの報酬の安価を，その前のエピソード（マタ 26: 6–13）に出てくる「ベタニアの塗油」の女性がイエスに注ぎかけた「三百デナリオン」

という法外に高価な香油と対比させていると解釈している.「マタイは，このように対照的な，女と男の金銭に関わるイエスに対する振舞いを読者に提示して，たとえ安価でもそれを受け取ってイエスを裏切ろうとしたユダの金銭欲を，読者に印象づけようとしたのではないか.」確かに，荒井の指摘通り，マタイ福音書においては，イエスが弟子たちに金銭欲を戒める場面が複数ある（マタ 6: 24; 19: 21, 23-24). 荒井献『ユダのいる風景』，15-16 頁.

59) 他に，例えば，イエスの宣教活動の始めを示すマタ 4: 17「そのときから（'Απὸ τότε)，イエスは『悔い改めよ．天の国は近づいた』と言って，宣べ伝え始められた.」また，イエスの受難予告の始めを示す 16: 21「このときから（'Απὸ τότε)，イエスは，御自分が必ずエルサレムに行って，長老，祭司長，律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され，三日目に復活することになっている，と弟子たちに打ち明け始められた.」

60) ［ ］は，マタイ福音書に固有の語.

61) 佐藤研訳「マタイによる福音書」脚註九の解説，新約聖書翻訳委員会訳，『新約聖書』，岩波書店，2004 年，169 頁.

62) 磯山雅，『マタイ受難曲』，202-203 頁.「ルター訳に基いて注解するカーロフが，この部分を『お前の言った通りで，まさにお前がそれだ es ist also/ wie du sagests/ eben du bists.』と説明していることからも裏付けられる….」(203 頁)

63) 'Εταῖρε, ἐφ' ὃ πάρει の解釈については問題があり，呼びかけの「友（同僚，仲間)」(ἑταῖρος < חֲבֵר) は良いとして，ἐφ' ὃ πάρει は訳出の可能性として〔1〕.「何のためにあなたは来たのか」，〔2〕.「あなたが来た目的を果たせ（＝あなたがなそうしていることをなせ)」が考えられ，明確な意味が確定し難い.

64) マルコ福音書では，この逮捕の場面で，ユダに対するイエスの言葉はない.「イエスを引き渡そうとしていたユダは，『わたしが接吻するのが，その人だ．捕まえて，逃がさないように連れて行け』と，前もって合図を決めていた．ユダはやって来るとすぐに，イエスに近寄り，『ラビ』と言って接吻した.」(マコ 14: 44-45)

65) 注 63) を参照.

66) マタイ福音書においては，イエスの逮捕や裁判に関わったユダヤ当局の構成メンバーの中から多くの場合「律法学者」が抜け落ちている．イエス殺害の計画は「祭司長や民の長老たち」によって立てられ（マタ 26: 3)，ユダが引き渡しを相談したのも「祭司長たち」であり（26: 14)，イエス逮捕に群集を手配したのも「祭司長や民の長老たち」であり（26: 47)，総督ピラトに引き渡したのも「祭司長や民の長老たち」であった（27: 1)．(これ以降も，ピラト邸での不利な証言をする人々として「祭司長や民の長老たち」27: 12，バラバの釈放を操作す

る「祭司長たちや長老たち」27: 20，復活後にうそを証言させる「祭司長たちと長老たち」28: 11-12）．マルコでは「祭司長，律法学者，長老たち」が多い．（Cf. マコ 14: 1, 43, 53; 15: 1, 30）さすがに，サンヘドリンの構成メンバーとして，またイエスの十字架の下でイエスを侮辱する者たちとして「律法学者たち」（26: 57, 27: 41）登場するが，全体的にはその役割が他の福音書に比べて大きく後退していると言える．これは，マタイの教会の構成メンバーに律法学者が多く含まれていた可能性を示唆する．

67) この語 *μεταμέλομαι*「心を入れ替える，後悔する，悔悛する」は，マタイの中では真に回心した者の態度として使われており，他に，二人の息子の譬えでの兄の回心（21: 29），またこれと対照的に，同じエピソードの中で「見ても，後で考え直さなかった（*ἰδόντες οὐδὲ μετεμελήθητε ὕστερον*, 21: 31）祭司長や民の長老たち」が指摘されている．確かに，この v. 31 の語順は，ユダの悔悛の場面と並行しており，ユダの後悔する態度が，祭司長や民の長老との頑なな態度と対比されている．

68) こわごわと夜陰と群衆に紛れて，大祭司邸宅の庭にまで入り込んだペトロは，最終的にイエスを知らないと主張するイエス否認に至る．（マタ 26: 69-75）．

69) J. Duncan M. Derrett, "The Iscariot, *Mᵉsira*, and the redemption," JSNT 8 (1980): 2-23. 須藤伊知郎「ユダの最期と『血の畑』の購入—マタイ福音書 27, 3-10 の釈義—」『新約聖書学』28 号，2000 年，27-40 頁．

70) マタイ福音書は，この預言をゼカリヤではなくエレミヤに帰している（マタ 27: 9）．実際には，10 節前半がわずかにエレミヤ書を示唆しているだけなので（エレ 32: 7-9/18: 2-3），このエレミヤという名を挙げていることについては議論があるが，預言者エレミヤを挙げるのは新約文書の中ではマタイ福音書だけであることを考慮すると，単なる勘違いとは言い難い．確かに須藤氏が説明するように「その民の指導層から拒絶された預言者の予型」としてエレミヤを意図的に明示していると思われる．須藤伊知郎，前掲書，29 頁．また，彼が支持する M. Knowles, *Jeremiah in Matthew's Gospels*, JSNT Suppl 68, Sheffield 1993, 245 ff. も参照のこと．小河陽，『旧約の完成者イエス』，235-236 頁．

71) LXX では，OT での שָׂטָן（Heb.「敵」）の訳語．סָטָנָא (Aram.)．*σατανᾶς* は音訳．

72) ルカ 4: 13 荒れ野で悪魔の誘惑と退き；10: 18-20 稲妻のようにサタンが天から落ちる；Acts 26: 17-18「わたしは，あなたをこの民と異邦人の中から救い出し，闇から光に，サタンの支配から神に立ち帰らせ，こうして彼らがわたしへの信仰によって，罪の赦しを得，聖なる者とされた人々と共に恵みの分け前にあずかるようになるためである．」

73) Cf.「あなたがたは，わたしが種々の試練に遭ったとき，絶えずわたしと一緒

に踏みとどまってくれた．…あなたがたは，わたしの国でわたしの食事の席に着いて飲み食いを共にし，王座に座ってイスラエルの十二部族を治めることになる．」(ルカ 22: 28-30) 「十二部族」と言うからには，ここにはユダも含まれていると考えるのが自然ではないであろうか．

74) ルカ福音書中で，名前で呼ばれる者は，「マルタ，マルタ」(ルカ 10: 41)，「ザアカイ」(19: 5)，「シモン，シモン」(22: 31)，「ユダ」(22: 48)．十二弟子の中では，ペトロとユダの二人のみ．

75) ユダの後日談についての伝承は，早い段階から外典・偽典や教父文書の中で発展した．『ペトロ行伝』第 8 章，『使徒ユダ・トマスの行伝』第 32 章，『ピラト行伝』etc. パピアスの断片三〔ユダの最期について使徒行伝からの発展〕など．大貫隆，『イスカリオテのユダ』，「II 新約外典」34-47 頁，および「IV 教父文書」59-87 頁を参照のこと．

76) 共観福音書だけでなく，一応ヨハネ福音書も参照比較のために加えておいた．

77) ただし，ルカ福音書において「回心」はひとつの重要な神学的テーマであることは確かである．ルカの救済論には，イエスの十字架上での死が人間に救いをもたらしたとするいわゆる贖罪論的な考えが希薄であり（ルカは意図的にそれを否定しようとする），人間の回心を強調する一面がある．

78) 例えば，マタイ福音書の並行箇では，羊は「迷い出る」(πλανηθῇ < πλανάω, マタ 18: 12)．しかし，ルカ福音書においては，羊の所有者が百匹のうちの一匹を「見失う」(ἀπολέσας < απόλλυμι, ルカ 15: 4)．同じ Q 資料に拠りながら，二つの福音書の解釈はかなり異なる．マタイが，このエピソードを教会論の中に位置づけ，教会共同体から罪を犯して離れ出た信者についての話として語るのに対し，ルカでは行動の主体は神であり，神から見て「見失われた者」である人間一般—それは抗いがたく罪のうちにある—を探し求め，救い出そうとする慈しみに満ちた意図を強調するのである．

79) 荒井献，『ユダのいる風景』，17-18 頁．荒井自身はこの解釈を退けている．

80) 磯山雅，『マタイ受難曲』，319 頁．

81) この「激しく泣いた」の部分での不協和音に満ちた長いメリスマでは，レチタティーヴォ・サッコの「彼」の世界を超えて，ある程度ペトロ自身の内面を表現する破格な扱いが見られる．

82) 杉山好「《マタイ受難曲》における象徴表現と現代」，『聖書の音楽家バッハ』所収，30-31 頁．ここのピッチカートは，冒頭合唱コラールのピッチカートのリズムに呼応しているように思えるのは素人判断であろうか．シチリアーノ風音楽によく使用される同じ 12/8 拍子でもあり，しかも，第一合唱の Wohin? を受けて，第二合唱がポリフォニックに 7 つの Wohin? に分かれる部分には，『7 つの罪』に象徴される『罪』を指摘する象徴数としての七が感じ取られるし，また，

「御覧なさい―どこを？―私たちの咎を Sehet―Wohin?―auf unsre Schuld」の意味するところの具体例として，ペトロのアリアがあるように思われる．

83) 磯山雅，『バッハ―魂のエヴァンゲリスト』，176 頁．

84) Ibid., 174-175 頁．

85) Ibid., 174-175 頁．

86) J. リストの夕べの礼拝用コラール（1625）の「目覚めよ，わが心よ Werde munter, mein Gemüte」第 5 節．旋律の原型は，ヨーハン・ショープによる（1642）．磯山雅，『マタイ受難曲』，314 頁．杉山好「〈マタイ受難曲〉理解のための覚書」，『聖書の音楽家バッハ』所収，173-174 頁．

87) 杉山好「バッハの宗教性」，『聖書の音楽家バッハ』所収，137 頁．

88) Ibid., 174 頁．「『マタイ受難曲』の本質を一言であらわす言葉があるとすれば，それは『慈愛』という言葉であろう．『慈愛が胸いっぱいにしみ透る』という表現を何かの本で読んでから，それはこの作品を聴くたびに新たにされる，私の実感となった．」Cf. 池辺晋一郎が『マタイ受難曲』のキーワードとして「トレランス（寛容）」を挙げているのも，言わんとしていることは共通なのではないかと思う．池辺晋一郎『バッハの音符たち　池辺晋一郎の「新バッハ考」』，音楽之友社，2007 年[11]，182 頁．

89) Ibid., 136 頁．引用は F. スメントの『ケーテンのバッハ』（バッハ叢書 5　白水社，1978 年，222-224 頁）による．

90) 磯山雅，『マタイ受難曲』，321-322 頁．

91) 佐藤研（立教大学教授）との個人的メール交換で，Nr. 39 と Nr. 42 のシンメトリックな対比について，佐藤は「Nr. 42 はむしろ，Nr. 8 のアリアと見事な対をなしていると思います．内容的にも，蝮の子が放蕩息子へと『子』の映像が逆転するところは強烈だと思います」という洞察を述べている．確かに，Nr. 7 でユダの裏切り計画と祭司長との取引（銀貨 30 枚）がレチタィーヴォで歌われた後に来る Nr. 8 のアリアは，血を流すイエスの御心と共に，イエスの育てた子が蛇に変貌する有様を歌う．同時に筆者が考えるに，この Nr. 8 の前で登場する香油を注ぐ「信仰厚い」女性の「涙」は，Nr. 39 のペトロの涙と重複するイメージなのではないか．その場合，前半部においては「香油を注ぐ女性」と「ユダ」が，後半部においては「ペトロ」と「ユダ」の対比が意図されていると想像することもできよう．

92) 磯山雅，前掲書，257 頁．

93) エーリッヒ・アウエルバッハ，篠田一士・川村二郎訳『ミメーシス』（上），ちくま学芸文庫，2004 年[3]，52 頁．

94) 石原綱成「ユダの図像学」，荒井献『ユダとは誰か』所収，岩波書店，2007 年

95) Ibid., 226 頁.
96) Ibid., 173-234 頁.「祈念図」の説明は，226-228 頁.
97) Ibid., 226 頁.
98) Ibid., 227 頁.
99) Ibid., 198 頁.
100) Ibid., 198 頁.
101) Ibid., 227 頁.
102) Ibid., 228 頁.

参考文献

Novum Testamentum Graece. [27th edition], ed. by E. Nestle and K. Aland. Stuttgart: Deutsche Bibelstiflung,1979.
『聖書』（新共同訳）旧約聖書続編つき，日本聖書協会，1988 年

エーリッヒ・アウエルバッハ，篠田一士・川村二郎訳『ミメーシス』（上），ちくま学芸文庫，2004 年[3▽上▽]
荒井献『ユダとは誰か　原始キリスト教と「ユダの福音書」の中のユダ』，岩波書店，2007 年
———『ユダのいる風景』，現代のカルテ双書，岩波書店，2007 年
池辺晋一郎『バッハの音符たち　池辺晋一郎の「新バッハ考」』音楽之友社，2007 年
磯山雅『マタイ受難曲』東京書籍，2006 年[8]
———『バッハ—魂のエヴァンゲリスト』，東京書籍，1985 年
大貫隆『イエスという経験』，岩波書店，2003 年
———『マルコによる福音書　マルコ福音書注解』，日本キリスト教団出版局，1993 年
大貫隆（編著）『イスカリオテのユダ』，日本キリスト教団出版局，2006 年
小河陽「マタイによる福音書」，大貫隆・山内眞監修『新版総説新約聖書』所収，日本キリスト教団出版局，2003 年
———『マタイによる福音書　旧約の完成者イエス』講談社，1983 年
加藤隆「第二章 ルカによる福音書」，大貫隆・山内眞監修，『新版　総説 新約聖書』所収，日本キリスト教団出版局，2003 年
ウィリアム・クラッセン『ユダの謎解き』森夏樹訳，青土社，2007 年
佐藤研（訳）「マタイによる福音書」，新約聖書翻訳委員会訳，『新約聖書』所収，岩波書店，2004 年
杉山好『聖書の音楽家バッハ—《マタイ受難曲》に秘められた現代へのメッセー

ジ』，音楽の友社，2000年
須藤伊知郎「ユダの最期と『血の畑』の購入―マタイ福音書27，3-10の釈義―」，『新約聖書学』28号，2000年，27-40頁
G. タイセン『新約聖書　歴史・文学・宗教』大貫隆訳，教文館，2003年
利倉隆『ユダ　イエスを裏切った男』，平凡社新書324，2006年
廣石望「マルコによる福音書」，大貫隆・山内眞監修『新版 総説 新約聖書』所収，日本キリスト教団出版局，2003年
アルフレード・ホイス「『マタイ受難曲』理解のために」（杉山好訳），『J. S. バッハの音楽宇宙』所収，音楽ブックス11，現代社，1985年，138-139頁
三宅幸夫「礼拝音楽を超えた破格の表出力」，『J. S. バッハの音楽宇宙』所収，音楽ブックス11，現代社，1985年
山田耕太「第四章 使徒言行録」，大貫隆・山内眞監修，『新版　総説 新約聖書』所収，日本キリスト教団出版局，2003年

Albright, W.F. and C.S. Mann, *The Anchor Bible Matthew*. Garden City, New York: Doubleday & Company,Inc., 1971.
Derrett, J. Duncan M. "The Iscariot, *Mᵉsira*, and the redemption," JSNT 8 (1980): 2-23.
Meier, John P. *A Marginal Jew: Rethinking the Historical Jesus, vol. 2: Mentor, Message, and Miracles*, New York: The Anchor Bible Refrence Library, Doubleday, 1994.
Nickelsburg, George W.E. *Ancient Judaism and Christian Origins—Diversity, Continuity, and Transformation*. Minneapolis: Fonress Press, 2003.
Viviano, Benedict T., O. P. "The Gospel According to Matthew," in *The New Jerome Biblical Commentary*, New Jersey: Prentice Hall, 1990.

本論文への図像の使用を快諾して下さった荒井献氏および石原綱成氏に謝意を表したい．また，図像については岩波書店の中川和夫氏のご配慮を受けたことをここに明記し，謝意を表したい．